１等・前後賞合わせて漏れなく災難！？

矢伝観維

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

１等・前後賞合わせて漏れなく災難！？

【Ｎコード】

Ｎ７５４８Ｓ

【作者名】

矢伝観維

【あらすじ】

特に突出した才能も能力も持たない普通の高校生・矢作橋（やはぎばし）　築（きずき）はバイトからの帰り道で異世界から来たという謎の老婆と遭遇する。老婆の住む異世界ではこの世界の統治権を巡って争いが起きていた。その争いは異世界内に留まらずこの世界も巻き込んでいた。築はこの争いを鎮める『駒』に偶然にも選ばれてしまっていたのだ。そんなファンタジーなことを真に受けなかった築は、平凡な高校生活を継続していたが、今までには考えられないような非現実的な出来事に巻き込まれ始める。異世界人による代理抗争の『駒』となってし

まった高校生のぬるい以上熱い未満な物語。

第1話　今日はお家へ帰ろう

「あと少し……」

矢作橋築はレジの画面左上に表示されている時計を睨み過ぎて眉間に皺がより、眼球の水分が蒸発し始めたその時だった。

「お疲れさまー」

終業チャイムよろしく次のシフトに入っている人の声で築は我に返り、勤務終了の喜びによって自然と顔も綻んだ。

カップラーメンを作っている時の3分も果てしなく長く感じるが、勤務終了まで後数分という時間も絶望を意識するくらい長い。時が流れるのをここまで深く噛み締めることなんて日常生活ではほとんど無いと思ったのは築だけであろうか。

コンビニのバイトが楽しいわけがない。

店先に張り出された店員募集のポスターを見て小遣い欲しさに適当に面接を受けて受かってしまっただけのこと。当然つまらない夕方勤務5時間は、節水中の男子トイレの如く流れるのが遅い。

カウンター内で特に何も無かったので形だけの引き継ぎをし、事務所に通じるパタパタ扉を開き入室する。パタパタ扉ではなく正式名称はスイングドアというそのままの名前があるが、パタパタする扉でパタパタ扉という呼称のがわかりやすい気もする。台車で追突されようが蹴り開けられようが、いつも変わらずパタパタしている健気なこの扉の働きを勤労感謝の日にでも労ってあげたいくらいである。

事務所内に設置されているコンピューターで勤怠登録をしようとスキャナーを手にとった。

「きずき君、新しいシフト組んどいたから確認しといてね」

築の雇用主であるこの店のボスにそう声をかけられ、全従業員が差別なく平等に労働できるよう緻密な計算のもとに作製されたシフト表に体を向ける。一目でこのシフト表が前週からの使い回しだということがわかったが。

「矢作橋……矢作橋築はと……」

自分の名前を念仏のように呟きながら、暇な放課後を労働力に昇華させる日程を携帯電話のスケジュールに書き込む。

マジでケータイって便利だなと現代人の大多数が何回かは考えたことがあるであろう今では常識的なことを築は思った。

「おつかれっした！！」

ボスにそう言葉をかける。

「ちゃんと勉強しなさいよ」

ボスは高校生の本分を再認識させるような常套句を垂れせつつも笑顔だった。

ボス、考えてもみて下さいよ。昼は学校で勉強に取り組み、放課後はコンビニであくせく働き、その後家で勉強っすか。やらねぇー、飯食って風呂入って眠くなって強制的に睡眠をとらざるをえなくなるまでの猶予をゲームしたりマンガ読んだりと満喫するんすよ俺は。ほら、勉強なんてしてる暇ないじゃないっすか。とは、当然言えない。

「え、あー、ほどほどにやるつもりっす……」

心の声は実に正直者なのだが、生の声は実に嘘つきだ。

「ほどほどにねぇー」

ボスの言うほどほどには何個かの意味がありそうだったが、大して気にも留めず、作法に厳しい上司ならカチンとくうような首だけの礼をするとそそくさと事務所を出た。

「さてと……」

ジュースとお菓子でも買って帰ろうと築は意気込むが、チョコレートやポテチはちょっと敬遠する。この時期の若者の肌にそんな刺激物を与えたならば漏れなくニキビをプレゼントされるし太るからだ。

厳選したジャンクな食べ物をレジに持って行き通学通勤併用の肩掛け鞄から財布を取り出す。

「きずき君、ちゃんと勉強しないとダメだよー？　あの人みたいになっちゃうよー」

さっき築と交代した深夜シフトの大学生がもう一人の深夜勤務の人を指差してそう言った。

「うるせーよ、指差すんじゃねーよ。　きずきぃー、こんなんなっちゃあかんよ」

あの人は大学を中退して自分探しキャンペーン開催中って言っていた。

「あはは……まぁほどほどにやるつもりっす……」

しゃべりながらも綺麗に袋詰めされているところがこの人らしい。

築は一応笑っておいたが笑ってよかったのだろうかと再確認。あんまり笑えないような気もしたが、無視したらこの2人のどちらかの心に傷を作ってしまいそうだったので仕方がなかったのでよしとしよう。

「夏は変な人が多いらしいから気をつけて帰りなよー」

「担任も何かそんなこと言ってました。　クソ暑いのに全身黒マントでうわぁーって下半身に飼っている獣を解き放つ人が出たらしいっすよ」

「あぁ、それあいつだねー。　趣味で生き甲斐らしいよー」

どんな自分を見つけたのだろうか。見つける以前に完全に抜け出せないラビリンスに閉じ込められている。

「そんなでしゃばりな趣味ねーよ。　きずきに誤解されんだろうが」

「あ、ごめんごめん。お前が飼ってるのは獣というか小動物だったねー、ハムスター的な」

「おい、ひまわりの種なんて食わないから。俺が食うのは女以外にはないの。　てめ、ちょっと表出ろよっ！！」

一応この2人は仕事中である。　幸い店内にお客様の姿は見受けられないが、監視カメラ越しにボスがウォッチしていることにこの人たちは気づいているのだろうか。気づいていながら堂々と仕事中

に下らない私語をしているのなら、相当な肝っ玉を保持しているのか単なるおバカか。
この2人は築の近所に住んでいる中学の先輩だ。幼い頃からよく遊んで貰ったりとよくお世話になっている。

「それじゃお先っす。　2人で熱い夜を楽しんで下さい」

「確かに今日は暑いねー、あはは」

「こいつと熱い夜を過ごす？　はっ、そんなことするくらいならこのちくわぶの穴にでも」

おでん専用トングでよく味が染みた美味しそうなちくわぶを挟み上げると築につきつけた。

「それは本当に熱い夜になりそうだねー」

「いや、やらないから。　もし本当にやったらお前どん引きするだろう、絶対に！」

2人のぴったりと息の合った会話ならば漫才のグランプリにでも出場すれば高額賞金を獲得できるかもしれない。
そんなことを思いながら築はコンビニ袋を片手に店を出た。

第2話　私のお墓の前で

仕事終わりの解放感、喫煙者ならここでタバコを取り出し火をつけるに違いない。仕事終わりの1本と言うのは喫煙者にとっては至福の嗜好品なんだとか。

それは一体どんな感じなのだろうと築は、煙と共に疲れや鬱憤を吐き出す自分の姿を想像したが、あいにく法律を犯すつもりは無いしタバコを吸ってみようという好奇心も無かったのでさっき購入した炭酸飲料を飲みながら家路につくことにした。

梅雨の時期には珍しく雲1つ見えない夜空には月が堂々と自分の存在をアピールするかのように淡くとも眩い光を放っている。

月の明かりなのか街灯の拙い明かりなのか区別を付けづらい薄暗い初夏の蒸し暑い道を抜けて、近道をするべく選んだ農道を、炭酸飲料をすすりながら歩くことにした。

農道の脇にある田んぼでは、発育著しい鬱蒼とした稲の森が見渡す限りに広がっていて、カエルが喧しくないている。

「立派な米になって日本の農業と食生活を支えてくれっ！！」

誰も見てないのをいいことにビシっと人差し指を稲達に向けそんな事を言っているとなんかワサワサした不快な物が築の顔面を襲った。

それは小さな羽虫の大群だった。

心にも無いことを言った罰であろうか。羽虫の群れに強襲され月明かりしかない畦道で人知れず慌てふためく。道と田んぼの境界線などこの状況で目視することなど築にはできず、田んぼに右足が嵌った挙句に全身をつ釣ってしまった。

七転八倒七難八苦七回転んで八回も起き上がる気力と体力を捻出できそうもなく、割と本気で泣いてしまおうと考えた。事実目頭が

熱くなり一筋の軌跡が頬に描かれたことは秘密にしたい。

「あーあ……あっはっはっはーー！！」

なんかもう残念過ぎて逆に笑えてきてしまう。

「痛ぇ、身体が動かない。……あれ痛くない？　脊髄反射で痛ぇって言ったけど痛くない」

それでも身体は全く動こうとしない。片足を田んぼに突っ込んでいるなんとも哀れな状態を解除したいのに身体が全く反応しない。応答せよ応答せよと全身にくまなく信号を発信するが沈黙を貫いている。

まるで時の流れが停止しているみたいだった。

早く田んぼから足を引き抜き羽虫からエスケープしなければ顔面のあらゆる穴から羽虫の侵入を許してしまうと懸念していたが、羽虫は襲ってくる気配がまるで無いどころかその場で停止したまま微動だにしていなかった。

宙で羽ばたきなしで浮遊するなど羽虫が行えるわけがない。偉大なる人類が生み出したヘリコプターでもふわふわと小刻みに動いているし何しろプロペラやエンジンは動いているからだ。

さっきまでうるさかったカエルの喧噪も止まり静寂が辺りを包んでいた。

風の流れや星の瞬きも感じられない。

時が止まっていた。正確には築の思考回路のみを残して全ての時が止まっていた。築の身体も羽虫もカエルも風や星といった大自然さえも時間の流れに乗れていなかった。それは誰かが一時停止ボタンを押したかのようであった。

死ぬ瞬間というものは今までの記憶が走馬灯のように駆け巡り、全ての情景がスローモーションで見えるという話を築は思い出した。

物語で見たのか誰かに聞いたのかはわからないが今はそれに近い状況のような気がした。

「俺は死ぬのか？」

これは死ぬ前に自分の軌跡を改めて受け止める為に神か閻魔かがお迎えが来る前に設けてくれたシンキングタイムなのだろうか。それなら美談に成りうる出来事をなるべく多くフラッシュバックするしかない。

「……」

脳の記憶を司る器官をフル稼動させたが、自分には今まで美談になりそうな事象がごく僅かしかなかったことを築はひどく後悔した。

第3話　バイバイ、ありがとう、さようなら

自分の半生にも満たない今までに起きたことを反芻していたそのときである。

一陣の風が吹いた。その刹那、闇に染まる農道の先から何かがこちらに近づいてくる。あり得ない状況に立たされ、そのあり得ない状況を自分なりに時が止まったと解釈し、いろいろ走馬灯のように思いを駆け巡らせていたという築の行為をばっさり切り捨てるようにさらにあり得ないことが起きた。

俺の走馬灯は一体なんだったんだ、ただ走馬灯って言いたいだけだったんだなと築の声に出ない喚きが届くはずもなく、その何かは止まっている時の流れを無視してゆっくりと近づいて来る。

これは築が異常なのか、それとも近づいてくる何かが異常なのか。確実に言えることはこの状況が異常ということだけである。

月の明かりによって照らされその何かが人であるということがわかったのは結構時間が経ってからだった。結構などという曖昧な表現を用いたのは、現在築の思考回路を除いてまわりの時間が停止しているので正確な秒や分がわからないし、何より近づいて来るその人がとても鈍足であったからだ。

まさか、下半身をダイナミックに披露する趣味の持ち主ではないかと懸念し心の中で身構えた気になる。ゆっくりと接近してくるその人は、腰が曲がり長柄の物を杖がわりにしていて、その雰囲気は老人のようであった。黒っぽいローブを頭から被り、杖がわりの長柄の物は先端が湾曲していて、湾曲している部分にはカバーがかけられているようだ。

「お主……」

その人が口を開き呟いた。

とてもしゃがれた声、影で顔も表情も窺うことはできないが老婆のような声である。携えている長柄は薙刀であろうか、ということはこの老婆は武道か何かに精通しているお方である可能性も高い。鍛えぬかれた精神から放たれる気合いで俺の止まった時間を正常に戻してくれるのではないか、などと期待の念を抱く。

「お主は生きたいか、それとも死にたいか」

謎の老婆は謎の質問をした。

「叶うならもうちょっと生きたい。　でももう俺死んでもいい気がしたきたぜ。　人生長いが謎の状況で謎のババアに謎の質問をされるなんていう謎な貴重体験をしてるんだから」

「答えぬか…」

「ババアちょっと待って、ステイ！　ババア！　」

築の声はババアに届いているようには見えない。それも当然である。築は自分では発声していると思っているだけである。

ババアは築がどのような状態であるのかを知ってか知らずか、おもむろに長柄の先端部分を築に向けカバーを外した。

それは薙刀などではなく、大きな鎌であった。タロットカードに死神とセットで描かれているようなでっかい鎌。月光を浴びて妖しく光る巨大な鎌を築の首にかけババアは喋り始めた。

「うわぁぁぁ！！　助けて！！　てか何それどこで売ってんの！？身体が動かん！！」

「怯えぬか……なかなか強靭な精神を持っておるようだ、選ばれた

だけのことはある」

「怖いよっ、怯えないわけないだろうが！！　さっきの質問の答えが死の一択しかないんですけど！！　右手と左手どっちだと言いながらどちらにもはいありませんみたいな！！」

「静観を極めるか……よほど死にたいと見えるな」

「えぇぇぇ」

そう結論付けたババアは、築の首と胴体をお別れさせようと鎌を大きくふりかぶった。

第４話　なんでだろう、あなたを選んだ私です

自分が斬首される瞬間くらい目を瞑っていたかった。
しかしこの状況に至っても築は目を見開きババアを凝視した状態である。
斬首された瞬間というのは僅かに意識が残っているという。下手すると自分の首無し胴体を見下ろすことになりかねない。それはそれは凄まじい怨念が残っていてもおかしくない。平将門の霊を封じる為に山手線や中央線が利用されているという都市伝説もわかる気がする。
築は死を覚悟していたが、大鎌の刃は首に触れる寸前で停止していた。

「かなり死が近くまで見えた筈じゃのに、相も変わらず嘲笑を浮かべておる……なかなかの度胸じゃ。　気に入った」

平然と殺人行為を遂行しようとしていたババアは得物を引くとその石突き部分で地面をコツンと叩いた。
その瞬間、今までうんともすんとも言わなかった築の身体が自由を取り戻し、羽虫は羽ばたき始め、カエルは元気に輪唱を始めた。
片足が田んぼに嵌まったまま一時停止ボタンを押されたものだから、急に再生ボタンを押された築はバランスを失い田んぼに倒れてしまう。

「ぺっぺ！！うあぁ……ドロッドロ……」

「うむ……素質を見る為に周りの時を止めお前を試してみたが……やはりお前は選ばれた程の何かを持っておる。　誇って良いぞ」

今の築を見てどこに誇る要素が垣間見えるというのだろうか。田んぼに落ちて埃まみれの泥だらけだ。雨で水嵩が増した田んぼは、ちっぽけな人間の衣類を全て水浸しにするなんていとも容易い。Ｔシャツもスラックスもスニーカーも見事にお釈迦になってしまっていた。しかし鞄だけはエナメル素材だったので無事であった。

泣きたいし喚きたい気分だった。でもせっかく状況がが変わったのだからこの機会に謎のババアに聞きたいことを投げ掛ける。

「あんた一体何者だ？　さっきのは何すか？　てか何に選ばれたんだ？」

矢継ぎ早に質問をする。状況を理解した上で的確に逃げ出したい、謎のババアとこれ以上の関係なんて築きたくない、顔見知りにすらなりたくない、赤の他人のままでいたい。

「儂が何者であるかなどたわいもないことじゃ。　さっきのはこちらの世界では魔法と定義されているような物だ。　お主はこの世界を救う者。　この世界に生きる人類６０億の中から儂がお前を選んだ。　その素質を試す為にお主の回りの時を止めたのだ。　首に鎌を当てがわれておるというのに、眉一つ動かさない。　なかなかの器じゃ」

「勝手に変なものに選ばないで下さい。　魔法で周りの時を止めた？　信じられません、そんなこと。　仮にそうだったとしても、それはあんたのミスじゃないっすか？　俺自身の動きも止まっててあんたの脅迫にも反応できなかったんだよ！！」

言ってやったぜとふふんと鼻を鳴らす。

「それでも構わぬ。　今はどんな奴であろうと早急に人員が必要な

のじゃ。　光栄だと思え、お主はこの世界を救うのだ。　当然引き受けてくれるな？」

「そんな適当に選ぶとかどんなだよ、名簿番号１番だからクラス委員長やってくれ、みたいなそんな感じですか！？」

「何を一人で呟いておるのだ……受けてくれるのであろう？」

安請け合いはよくない。クラス委員長なんてものは、大して仕事は無いよとか言うくせにかなりチマチマした仕事が多いし真面目を一般生徒より強要されるしろくなことがない。

「やだっ！　断るっ！　それではっ！」

築は短く拒絶すると踵を返し残っている体力をフル導入して泥水が染み込んだスニーカーをシャバシャバ言わせながらダッシュでその場を後にした。

またババアに何かされる前にこの場を逃げなければと思い、決死の覚悟で突っ走った。もう自分がどこを走っているかなんてわからない。慣れ親しんだ道をただただ感覚を頼りに自宅を目指して激走する。

どれだけ走ったのだろうか、築は意を決して後ろを振り返ってみた。

そこに人影は無かった。

どうやら追いかけて来る老婆というような怪談にはならなくて済みそうだ。口裂け女は凄い速度で襲ってくるが、ポマードと数回唱えると助かるらしい。そんな怪談よりも魔法で時間を止める鎌を持ったババアのがよっぽど怖い。

「ふぅ……まったく、体力測定でも何でも無い日にこんなに本気で

ダッシュするなんて思わなかったぜ。　中学以来まともにスポーツをしてない帰宅部の体力の無さを見くびんなよ」

心臓は１６ビートでリズムを刻んでいた。
結構な距離を全力疾走したので身体は失った酸素と水分を欲していたが、さっきの騒動でせっかく買った炭酸飲料を放り出してしまっていた。だが、もうすぐ平穏で安全な我が家だ。
夏の夜は変質者が増えるので気をつけるようにとの警告を担任から伝えられた矢先に謎のババアと遭遇である。泥まみれで全力疾走する築もはた目からはなかなかの変質であるが。

「世界を救うとか何だ……まっ、バイト疲れと暑さのせいで幻覚が見えて幻聴でも聞こえたんだろ。　夢だな、うん、夢」

さっきの未知なる出来事を白昼夢扱いにして家に帰るのだった。

第5話　全部、丸めて

まさかの臨死体験に加え全力疾走により疲れはピークに達していた。

自宅の門扉を開けると、千切れんばかりに尻尾を振った愛犬のモコが駆けて来た。

「モコ！　おすわり！」

築の命令はちゃんとモコに届いたはず。しかしモコは命令など無邪気に突っぱねて飛び付いて来た。いつもならスラックスが毛だらけになってしまうので距離をあけて接するのだが、今は泥だらけだしこの際どうでもよかった。

「ただいまー、よーしよしよし」

夜も遅い中でモコと戯れる。ゴールデン・レトリバーのくせに少々落ち着きに欠けるモコだが、こんなでも一見様や不審者にはちゃんと吠えるので番犬としての責務は果たしている。近所の人やいつもの検針員のおばちゃん、家族の知り合いとかにはあんまり吠えないから優秀だ。

「うるさいっ、きずき！　帰ってきたんなら早く入ってきなさい。モコだって眠たいんだから可哀想でしょ！」

玄関から母の優（ユウ）が怒鳴っていた。母の声量の方がどう考えてもうるさい気がするが、あえて火に油を注ぐことをしても得にならないので素直に従う。

「ごめーん！　今入る」

モコは楽しい時間が終わることに気付いたのか少し寂しげにくうんと鳴いた。

「よしよしまた明日な、おやすみモコ」

モコはトボトボと小屋に向かって行った。この瞬間はなんとも言えない悲しみがわいてくるので慣れないものである。

玄関を開きシャバシャバになった靴を脱ぎ捨てリビングに入る。泥だらけになったのがバイト用のスニーカーだったのが不幸中の幸いだった。これが通学用のローファーだったら母にどつかれ後にネチネチとお小言を喰わされていたところだ。

リビングの扉を開けると、エアコンの冷気が火照った身体に染み入るように流れてくる。

「兄ちゃんおかえりー」

そこには母と妹の航（ワタリ）がいた。母は湯呑みを片手にテレビでバラエティ番組を見ていて、航は教科書とノートをテーブルに散開させ勉強をやっていると見せかけつつテレビを盗み見ていた。

「あんた何でそんなに汚れてるのっ！　なんか変なことでもしてたんじゃないでしょうね！？」

母は少しキレ気味であった。

「ほんとだー、兄ちゃん泥だらけじゃん。　あはは、ウケ狙い過ぎだよぉ」

「狙ってねーよ、リアクション芸人でも我が家ではオフだよバカタレ」

「もう早くお風呂入ってきなさい！　あーあ、フローリングも汚して！　ちゃんと自分で自分で掃除しなさいよ！」

とりあえず遅くなったワケを話さなければ、ウケを狙って汚れたということになってしまうかもしれない。挙句の果てに母に叱責されるという残念な流れに呑まれることになる。

しかし、赤裸々に語って信じてもらえる可能性は無いに等しい。ここは今まで培った家族の絆に賭けて語りかけるしかなかった。築は口を開く。

「母さん、帰宅途中に魔法使いのババアに襲われた」

「……はぁ？」

賭けにすらなっていなかった。

空気が凍った。それはエアコンの出力もテレビに映っているお笑い芸人のネタが寒かったのも原因ではないのは一目瞭然だった。ＭＣを務める人気芸人は必死でその空気を打破すべく奔走している。

一発屋と呼ばれる若手芸人に大切な場所を任せたＭＣが悪い。だがＭＣとしては一種の賭けでもあったわけだ。

築も賭けが失敗してお茶の間がこうなることは想定の範囲内であったため、狼狽えたりなんかせず、言葉を繋げ母と航を畳み掛ける。

「なんか時間を止められてでっかい鎌で脅されて田んぼに突き落とされた。　いやー、まいったまいったー！」

母と航は顔を合わせながら目を丸くしていた。

「納得してくれたかな？」

「きずき、あんたがバカってことは知ってたけど常識はある子だって思ってた。　それが常識も無いなんてあんたには一体何があるの？」

「いや、俺に聞かれても……」

母はずばり酷いこと言う。

「兄ちゃん、怒られるのが嫌だからって何もかも失うのはリスクが大きすぎるとあたしは思うよ」

航の方が傷を抉るのに長けていた。

ここで諦めてしまうわけにはいかず、半ばむきになって話を続ける。

「マジなんだって！　嘘っぽいかもしんないけど本当なんだってば！」

「あーもう、いいからお風呂入ってきなさい！」

「なんなんだよチクショー！」

「兄ちゃん、お風呂でおもろい言い訳考えて来てねー」

「うるせーよ、ノートが真っ白だぞ。　口じゃなくて手を動かせ手を！　なんだよ……やってらんねえよ……」

築は悲壮感と敗北感を堪え、しぶしぶ風呂場に向かった。

「うりゃっ！」

脱衣場の洗濯カゴに泥がこびりついているTシャツを溜まった負の気持ちを一緒に丸めてぶちこむ。乾いた泥が床に撒かれてザラザラする。

どうやら時間的に、入浴するのは築が最後のようだった。

掛け湯をして湯船に浸かると疲れが湯にとけていくような心地よい気分になり、リラックスした築は大きな息をはーっと吐いた。風呂は命の洗濯、その通りだ。

「きずきー、母さんもう寝るからお風呂のお湯捨てないで残しておいて。　わたりも自分の部屋で宿題させるからリビングの電気もお願いね」

「りょーかい。　てか母さん！　何で泥だらけだったか聞かないのー！？」

浴室での反響した自分の声はまるで別人の声のようであった。

母からの返答は無い。築の話が下らなすぎて萎えてしまったらしい。

築も不思議体験のことなどもうどうでもよく、手早く入浴を済ませリビングの電気を消し自室へと向かった。

その前に築は日課である仏壇を拝むために和室へと入った。

熱心な仏教徒というわけではなくこれは小さい頃からの日課、ご飯を食べることや寝ることと何ら変わりない行為だと築は思っている。

病気で床に伏して重篤だった築の父方の祖母・黎（レイ）は、築が産まれ

るまで生きていられないと言われていたのだが、築が誕生する瞬間まで奇跡的に生き長らえてから往生したと両親から聞いていた。築の記憶に残ってはいない祖母だけど、自分が１７年間無病息災なのは祖母の加護の賜だと築は思っている。

「今日もありがとうばあちゃん」

そう感謝しながら仏具を鳴らし手を合わせた。

自室に入りベッドに突っ伏す。どうやったら今日の希有なイベントを家族に信じさせることができるのかを考えようとしたが、何も思いつかない。やっぱり全て忘れて、夢だったことにしておくのが最善だと思われた。

「はーあ、どうせ信じてくれないよなあいつら」

もう真実だろうが虚実だろうが今となっては関係ない。明日になったら忘れてるだろうし、寝てしまおう。それが築にとっては最善だと言えた。

第６話　回る回るよ

アラームをセットした携帯もまだスリープしているのに築のが一足先に目が覚めた。
寝起きの気分は普通、何か夢を見ていた気がしたが覚えていない。大した夢ではなかったのだろう。
ふんわりと漂う味噌汁の香りが築の部屋を充たしている。今日の朝食は和食であろうか。
疲れていたはずなのに携帯電話のアラームが起動する前に起床してしまったことを悔やみつつ時間を確認する。
時刻はＡＭ６時を少し回ったところ、起床予定時刻より３０分ほど早く起きてしまったようだ。
早朝とはいえ気温はうっすら汗をかくくらいに高く、もう少し眠りたかったが絶対に寝れないと思ったので、ちゃちゃっと登校準備をしてのんびりと朝食を楽しむという選択肢を選んだ。

「ふぁぁぁぁ～～」

盛大に伸びをする。猫は伸びをすると文字通り伸びて、目を疑うくらいに長くなるからびっくりだ。
夏服のスラックスは泥染めになってしまったので、生地が厚い冬服のスラックスを引っ張り出して穿いた。夏には必要ないと思われる保温効果は、もう既に発揮されていて、太ももからふくらはぎまで蒸れ始める。通気性も抜群に悪い。ジャージでの登校は禁止されているので、冬服を穿かない以外の選択肢は学校を休むしか残されておらず、制服が汚れたという不憫な理由で欠席するなど学校も親も認めてくれるわけがないので、実質は一者択一だった。
もう学校に行くしかない。築は置き勉をしているので、鞄は弁当箱を入れる為だけの箱と化している。空に近い鞄の中に携帯電話や

ら財布やらを放り込む。
先ほどから気になっていたのだが、壁越しに航の部屋からアラームと思われる着うたが聞こえていた。
あんなうるさい着うたが鳴り響く部屋で熟睡できる航は、歌唱力のある良い声を持った見知らぬおっさんが自分の部屋で流行りの曲を熱唱しても気付かないのではないだろうかと思える。
築の場合はいくら安眠していようとも、部屋に誰かが入ってきた時点で目が覚める。
気持ちよく寝ている妹を叩き起こすのはしのびないが、このまま放置していたら航は遅刻してしまうかもしれない。

「おーい、起きろー」

兄心が湧いた築は、扉越しに声をかけると同時に扉を数回蹴った。これで目覚めないのならばもう知らない、兄としての責務は果たした。
顔を洗いリビングへと向かう。
そこではクールビス仕様の服に身を包んだ父・東(アズマ)がモーニングコーヒーを片手に朝刊の地方欄に目を通していた。
テーブルには炊きたてご飯にシャケの塩焼きと味噌汁があり、コーヒーと和食は合うのだろうかと築は疑問を抱きつつ父に挨拶をした。

「おはよう、父さん」

「おはようさん、早いな」

「うん。　あれ？　じいちゃんは？」

「さあ、散歩じゃないのか？」

「ふーん」

築の祖父・巌（イワオ）に限らずお年寄りは目が覚めるのが早い。東も巌程ではないが年々目が覚める時間が早くなっていると嘆いていた。

朝の散歩に出掛けている祖父が帰って来たら、みんな一緒に朝食を摂るというのがいつもの矢作橋家の朝の風景である。

「おーはーよー」

航が低血圧のだるだるオーラ全開でやってきた。

ボサボサの髪に眠そうな半開きの目を擦っている姿は年頃な女子中学生とは一体何なのだと疑問すら浮かんでくる。

「あーあー、彼氏には見せられないね」

「母さん、そんなのいないもん、だから困らないもん」

「彼氏に限らずそんなお疲れさまな顔を家族に対しても見せんなよバカわたり」

航はまともにしてればなかなかの美少女だ。身長も１６５?近くあり、今はボサボサのくせっ毛もしっかり手入れすれば端正な顔とマッチして、中高生向けファッション誌で活躍できそうな風貌である。

築も整った顔をしているのだが、ファッションとやらに無関心な為に宝の持ち腐れとなっている。眼力が非常に強いので、他校生に絡まれたりもよくしていた。

「兄ちゃんうるさいよーー」

「目ぇ半開きで応答すんな」

「あれ、きずき？　あんた何のんびりしてんの？　今日は早朝テストない日なの？」

「えっ……」

早朝テストとは、築の通う県立の進学校・西康生（ニシコウセイ）高校で毎週火曜日の始業前に実施される小テストである。授業の復習と補填を兼ねていて、合格点を取得しない場合と遅刻をした場合は居残り補習となる西校生にとっては苦痛の仕様となっている。

「やっべぇぇぇ！！」

築は脱兎の如く和室へ向かい、仏壇に朝の挨拶を捧げる。

「ばあちゃん！　いってきます！」

冷や汗タラタラで玄関に向かう。

「バカ！　きずきー、お弁当忘れてる！」

「ありがとう母さん！　それじゃ、行ってきまーす！」

庭に停留していた自転車に跨がると、ギアを一番重い６に設定して学校へと全速力で向かった。

「父さん母さん、兄ちゃん何で仏壇なんか拝んでたのかな？」

「さぁ？」

築が学校へと旅だった数分後、リビングの扉が開き2人の人間が入ってきた。

「おじいちゃんおかえりー」

「あぁ、ただいま。　レイさんや、朝食にしようかの」

「うむ……」

巌の後ろに立っていた黎は夏だというのに、全身に真っ黒な布を纏っていて長柄の何かを持っていた。

第7話　花びらの様に

乗用車やトラックが蟻の行列のように途切れない国道に沿って学校がある市の中心部へと向かう。

全力で立ち漕ぎをしたのも虚しく、早朝テストには間に合いそうにない。それも当然だ。家を出た時刻に早朝テストは開始されたのだから。

築は軽い酸欠と鉄の猪から吐き出される排気ガスによってもうフラフラだった。昨晩から人知れず疲労困憊している。藁にもすがる勢いで誰かに慰めて欲しかった。

早朝テストの真っ只中にある学校は、１０００人近くの生徒が押し込められているとは思えない静けさに支配されていて、自転車のスタンドを立てる音さえ特異な物に聞こえた。耳を澄ませば、答案用紙にペンを走らせる音が駐輪場にまで聞こえてきそうであった。

正面玄関に入り、苦し紛れの早朝テスト欠席理由を練りながらローファーから上履きへとシフトチェンジをする。

「……矢作橋くん？　お、おはよう……」

築に声をかけたのは、同じ2年1組に籍を置く日名（ヒナ）　桜子（サクラコ）だった。

「日名さん？　早朝テストはどうしたの？」

「ちょっと寝坊しちゃって……」

「日名さんも寝坊するんだねー」

桜子は成績優秀であり、非常におっとりした性格でどこか護ってあげたくなる儚さを醸し出している優しい笑顔が魅力的な女の子だ。

口下手なので男子との会話は苦手である。
そんな女の子が寝坊するイメージなんて湧かなかった。逆にいち早く席に着き、テストに備えているイメージなら簡単に湧いた。
「もしかして早朝テストがあること忘れてたとか？　あっはっはー、あるわけないか！」
「どうしてわかったの？」
自虐するつもりで言ったのだが、まさかの真相を暴いてしまった。もっと崇高な理由が飛び出してくるかもと思ったが、自分と一緒だったとは。
「偶然だねー、俺も早朝テストの存在なんて綺麗に忘れてた。　少し早く起きたことに感嘆してたくらいだもん！　早朝テストどんだけ空気なんだよ、コラ！」
「ふふっ、矢作橋くん面白いね。　玄関で男の子とこんなに話すなんて初めて」
「きずきでいいよ、矢作橋とか長いし。　おい、とか、お前でもいいよ」
親しい者は大抵きずきと呼ぶ。ちくとかちっくんと呼ぶ者もいるが、築はあんまり気に入っていないし推奨もしていない。
「じゃあ、お前って呼ぶね」
「え、あ、う……うん。　じゃあお前で！」

それをチョイスするとは思ってなかったので少し狼狽してしまった。

「ふふ、冗談だよっ。　一緒に怒られに行こ、きずきくんっ！」

軽く握った手を口元に添えて微笑む仕草がなんともしおらしい。

「おう！」

同じクラスなのにほとんど会話を交わしたことの無かった女の子と少し親しくなれたのだから、たまには遅刻というのも良いものだ。特にこれといった会話をしなかったので、人影の無い廊下には２人の足音が反響している。真夜中だったらさぞ不気味だったであろう。

お互い僅かな気まずさを感じていると、いつの間にか目的地に到着してしまった。教室の前に立ったところで、まともな言い訳が思いつかなかったことを後悔するがもう遅い。

意を決して扉をスライドさせた。

「すいません、遅れました！」

可能な限り誠意を込めた声で築は言った。

テストに悶絶していたクラスメイトの視線が痛い程に突き刺さる。

「矢作橋と日名か、珍しいな。　ちょっと廊下に出ろ」

教卓から教室中を舐め回すように見ていた担任・蜂須賀（ハチスカ）は、２人と共に教室を出た。

「矢作橋はともかく、日名が早朝テストに遅刻するなんて珍しいな、

矢作橋はともかく」

築は毎回早朝テスト開始ギリギリに入室するし、テストに合格するか不合格するかの割合もどっこいどっこいだったので、わざわざ駄目を押さなくてもいいのに。

「ホントにすいませんでした！」

「すいませんです……」

「まぁいい。　2人は再テスト組の奴らと一緒に居残りな」

担任が言い終えたところにタイミングよく予鈴が鳴り、西校生達をテストの呪縛から解き放った。教室から喧騒が漏れる。

「テキパキ答案を回収、ホームルームの時間までトイレ休憩な」

担任は集まった答案用紙の束を脇に挟むと教室を出て行った。

2人はそれぞれ自分の席へ向かう。築の席は教室の一番奥の列の最後尾、日名の席は前の扉の目の前で、対角線上の位置関係から見ても、用がない限り2人が接する機会はあまり無かった。

席に着くと隣の席の男が喋りかけてきた。

「何？　きずきは日名さんと付き合ってるの？」

「はぁ？」

胸板を見せつけるかのようにワイシャツのボタンがやたら開いている悪友・豊田（トヨタ）　光太郎（コウタロウ）はそんなことを言った。

「それあたしも興味あるなぁ。　早朝テストに2人して間に合わないなんて……朝帰り的な？」

豊田に呼応するように前の席の女子・刈谷（カリヤ）　梨華（リカ）が食い付いてきた。

「上から読んでも下から読んでもーー？」

「刈谷梨華！！　って誤魔化さないでよ！！　ちっくんは何であのヒナちゃんと一緒だったの？」

刈谷はゆる巻きにされた髪を弄りながら築を問い詰める。

「たまたま偶然にも玄関で会っただけだ、深読みすんなバカ」

「バカって言うな。　あーあ、今日のテスト超簡単だったのに勿体ないよね。　勿体ないおばけが出るレベルだよ」

そんなことで出没する勿体ないおばけはよっぽど暇なのだろう。

「日名さんは隠れ美少女だ。　深い森に咲く一輪の花だ」

「あん？　不快な銛で裂くインリンの母？」

「耳、大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

豊田の表現は確かに的を得ていたが、なんか腹が立つ。

とりあえず話題を変える為に築は言葉を紡いだ。

「お前らさ、謎のババアに襲われたことある？」

「……」

築は溜息を漏らしながら机に突っ伏した。

第8話　我らを狙う黒い影

分かってはいた、だからしょげるしかない。

「どういうこと？　ちっくん、どんなババアに襲われたの？」

「死神が持ってるみたいな鎌を俺に突きつけて、何かに選ばれたから引き受けてくれって脅された」

「きずき、それは謎のババアっていうより危険なババアだな」

「危険な時点で十分謎なババアだろうが」

「確かに。　新手の宗教勧誘の類じゃねーの？」

「うぅ……、あれは神の力ってやつだったのか……」

世の中の宗教団体がいかようにして信者を増やしているかなど詳しくは知らないが、時間を止める神通力をこの身で体験してしまった築は強く否定できなかった。

「ちっくんちっくん！　そんなことはどうでもいいんだよー！　ヒナちゃんのことどう思う？」

「どうって言われても……」

「ヒナちゃーーーん！　ちょっとこっち来てーーー！」

「うわっ！？　呼ぶなよバカ！」

刈谷は築と日名をカップルにする恋のキューピット役にでもなりたいのであろうか。しかしさっき説明した以外に語るべきことなどなく、日名を召喚したところで居た堪れない空気になってしまうのは明白なので刈谷の行為は悪女の深情けになりかねない。

「おーい、うるさいぞー！　ホームルーム始められないぞー」

脂汗が浮いた額をハンドタオルで拭いながら担任がやってきた。

「あーあー、先生来ちゃった。　ちっくん、また後でね」

「後なんてねえよ、梨華。　ちょっと疲れたからマジで寝るわ。バリケード役頼んだぞ」

重要な任務を刈谷に命じた築は再度机に突っ伏した。

刈谷は見た目はギャルっぽいが、根は真面目である。授業中に寝たりこっそり携帯をいじったりはしない。盾役に最適の人選だろう。

今までホームルームで重要な案件が語られたことはあまりない。このまま1時限目が始まるまで寝ていても差し支えないだろう。

学校の机で熟睡なんて簡単にはできない。姿勢や体勢を考え、顔を預ける土台の堅さをタオル等で和らげ、教師の目を盗み、指名を回避してやっと完成させられる物だ。

どうやら奇跡が起きたようで、築はホームルームを抜け1時限目の終盤まで眠れていた。

だがやはり最後の関門を突破するのは容易ではなかった。

「矢作橋！　おい、矢作橋！」

「ちっくんちっくん、当てられてるよ」

刈谷は築の身体を揺すった。

「だから付き合ってねえよっ！！」

築は勢い良く立ち上がり大きな声で返答した。

「ほぉ矢作橋。　先生の授業には付き合ってられないってそういうことか？」

「え……」

教室のいたるところから失笑が漏れていた。

「矢作橋、お前寝てただろ？」

「え、いや……大丈夫です！　もう起きましたから」

前の席の刈谷は必死で笑いを堪えている。

「大丈夫の意味がわからん。　とりあえずこの問題解いてみろ」

解けるわけないだろう。もう運にかけるしかない。

「－５？」

「……正解だ。　なんで－５という解が導き出せた」

こうなったら当てずっぽうだ。

「えと、解の公式を使ってその解を整理すると……」

「なんだ、わかってるじゃないか。　今日は少し早いがここまでにする。　クラス委員、号令！」

「すごくね、コレ。　今日の占い絶対俺１位だわ」

今日はかなりツキがあるみたいだ。宝くじでも勝ったら１等とか当たるかもしれない。

「アレ？　もう１時限目終わったん？」

今起きた豊田のステルス能力に若干嫉妬した築だった。

休み時間に入った。豊田の女の子を惹きつける極意を刈谷と共に聞き流していると声をかけてくる者がいた。

「梨華さん……さっきわたしに何かご用だった？」

声のした方向を見ると、日名が立っていた。

「あ、そうだったそうだった！　ねえヒナちゃん。　ちっくんのことどう？」

どうってなんだよどうって。いろいろ端折りすぎだろう。

「好きですよ。　おもしろいし、とても話し易くて」

好きという言葉は使い方が色々あるので早合点するとバカを見る。

「そうなのヒナちゃん！！　こんなんが好きなの！？　バカだよち

っくん？」

「そうだよヒナちゃん、俺バカだよ？」

変に否定することもないので乗っておいた。

「あ、さりげなくヒナちゃんって呼んだよ、ちっくん」

「それでいいよきずきくん。　ふふっ、たまには遅刻もいいかもねっ」

恋愛感情なんてなくても女の子から好きと言われれば男ならば嬉しいに決まっている。それもお淑やかな美少女から言われたならばなおのことだ。前の席のギャルにバカだのアホだの言われても余裕綽綽で中和できる。

「日名さん、きずきはやめといた方がいいかもよー？　昨日謎のババアに変な宗教に勧誘されたらしいから！　まあ、きずきなりに考えたネタだろうけどな」

「そうなのきずきくん？」

日名は心配するような視線を築に向けた。

「なんか神の力か魔法かで時間を止められてさー、お前はこの世界を救う者に選ばれたとか言われたんだよ、脅されながらさ。　でも大丈夫、逃げたから、ササッとね！」

そう築は語ると、非常口に描かれているような人型のマークのポーズをしていかに慌てて逃げたのかを表現した。

「……そうなんだ。　きずきくんが……。　居残りたぶん２人だけだと思うけど頑張ろうね！　わたし席に戻るから！」

築は一瞬、日名の表情と日名を取り巻く空気が冷たくなったように感じた。

「きずきー、２人っきりフラグか？　激しいことすんなよ？？」

「きゃーやらしー！」

豊田と刈谷の野次によって、日名が発した違和感など忘却の彼方へ旅立ってしまっていた。

第9話　光と影のなか

日名のことが少し気になっていたが、特に目立ったこともなく1日は過ぎていく。

午前中は睡魔に抗いながらもなんとか無事に過ぎ去った。

頭も身体も使わなくても腹は減る。待ちに待ったランチタイム、学校生活において1番の至福の時間と言っても過言ではないだろう。

「そんなにがっつくと詰まらせるよ？」

刈谷の忠告もスルーして、カレーのライスも飲み物です、とでも言わんばかりに弁当を流しこんだ。

「きずきはほんともったいないことしたなー」

豊田は下敷きで扇ぎ胸元に風を送り込みながら、薄茶色の長髪が目に入らないように調整して言った。

「モグモグ……、何がもったいないんだよ？」

「早朝テストだよ、テ・ス・ト。　蜂須賀のミスか知らんが、今日の問題は先週やったのと全く同じ問題だった。　俺でも満点とれてるんじゃね？　遅刻したばっかりに強制居残りだもんな、お前」

「マジか……。　そりゃ豊田のバカでもなんなく満点だわな。　久々に逆満点じゃない満点とれてよかったで・す・ねっ！」

2年1組で遅刻したのは築と日名だけだ。欠席者は後日に再テストなので、この状況ならば必然的に居残りは2人だけだ。

「あっはっは！　ついてないねー。　でもよかったじゃん、ヒナちゃんと一緒だもん。　あたし的にはちっくんが1人でぽつんと居残ってた方がウケるんですけど」

「そうそう梨華の希望通りに事は運ばせねー！」

刈谷は笑いながら築の肩をばっしんばっしんと叩いた。

「まぁいいじゃねか、きずき。　あの魅惑のニーソに見とれながら居残っとけ」

「ニーソか……、嫌いじゃない、むしろ大好きだけど早く帰りたいぜ」

「はいはい、黙ろうか」

楽しい昼食タイムはあっと言う間に過ぎ、午後の授業も矢の如く経て、帰りのホームルームも実に平凡に終了した。

「これからここで居残る奴がいるから用の無い奴はとっとと出てけー、部活行く奴もさっさと出てけな。　矢作橋と日名はプリントを取りに来い。　終わった頃にまたくる」

担任の呼びかけに従順な1組の生徒達は、各々向かうべき所に向かい、担任も野暮用があったのかその場から消え去った。

「そんじゃ今日は先に帰るわ。　頑張れよ、きずきー」

「またね、ちっくん！」

いつも帰路を共にする豊田も、築の居残り補習が終わるまで待つ気はないようで、イヤホンを耳に突っ込むと足早に教室を後にし、刈谷もクラスの女の子達とはしゃぎながら退室した

「死なないように気をつけて帰れよっ」

豊田と刈谷に応えつつ教卓に残されていた問題用紙と解答用紙を摘み上げ、それをひらひらさせながら自席へと着いた。

教室には2人だけが残っている。

対角線上の席をチラッと見ると日名と目が合った。窓から降り注ぐ夕方の陽射しのせいか、顔が熱い。

これは恋だろうか、いや無いな。女の子と視線が合ったらどことなく照れくさくなるのは生理現象と同じレベルであろう。

机に散開させた問題用紙を眺める。豊田の言った通りそれは担任・蜂須賀のうっかりで前週は悩まされた問題で溢れていた。だが、初見じゃなければこっちの物だ。

みるみるうちに解答欄が埋まった。

「ふう……楽勝！」

日名はまだ解答している。律儀に問題を解いているのだろうか、日名より先に終えた築は優越感に浸る。

「はーい、やめ！　再テスト終了、もう帰っていいぞ。　さよならなー」

今朝のテストの採点をしているときに自分のミスに気づいても遅く、2人の答案も合格点だと分かり切っていた担任は、テストを集めることもせず言い終えるとそそくさと出て行った。

担任も面倒臭いならこんな再テストやらなければいいのにと思ったが、もう終わったことなので愚痴っても仕方がない。

「さーて、帰ろっと」

席を立ち机の横に引っ掛けていた鞄を持とうとした。

「きずきくん、ちょっと待って！」

日名が後ろに何かを持ちながらパタパタと築のもとへと駆けてきた。

「どうしたのヒナちゃん？」

「お願いがあって……」

「俺にできる事なら何でも聞くよ？」

「ありがとう……」

「それでお願いって？」

「うん……。　きずきくん、この世界の為に死んでくれないかな？」

「……え？」

後ろに持っているプレゼントを出すのと同時に告白の言葉を頂けるのではないかと淡い期待を抱いた自分が恥ずかしい。しかし、一体何の冗談なのだろう。そのお願いは聞けないし、はいわかりましたと首を縦に振る奴を見てみたい。

「ごめんね……」

日名は後ろに持っていた裁ち鋏の切っ先を築に向ける。誰だよ、プレゼントなんて甘酸っぱいこと考えたのは。

それは普通の鋏と比べずとも殺傷力が高いことは明白だし、普通の鋏が可愛く見える程に大きい。

日名は家庭科部だったな、なんて悠長に考えている場合ではない。言葉から察するに明らかに布ではないものを切ろうとしている。

「ちょっと、ヒナちゃん？　どういうこと！？」

「……」

これがあの日名なのだろうか。淑やか、穏やか、バカ言うなって。朝見た黒く澄んだ瞳なんてどこにもない。筆を洗った後の水のように濁った目をしている。テレビで見る殺人犯の瞳もこんな色をしていた気がする。

「ごめんね……」

日名は裁ち鋏を構えて築の胸を目掛けて突っ込む。

「っ！」

日名の突きを紙一重で避ける。だが避けたと同時に右肩付近に激痛が走った。白のワイシャツは裂け血で滲んでいる。窓枠に刺さったままになっていた折れた画鋲の仕業だった。

日名の手によるものでなくとも、もう冗談では済まされない、怪我を負ってしまった。怪我どころではない、マジで急所を狙って鋏

を繰り出した。
昨日の出来事とは反して、今日は実に現実的だ。本当に殺される、そう思うと鼓動は異常に高まり嫌な汗が背中を伝う。夏なのに寒気すら感じる。

「ごめんね……」

日名は同じ言葉を繰り返しながら再度武器を構える。無言よりも不気味だ。

「ごめんね……」

日に照らされた裁ち鋏がきらりと光る。
さっき避けた時に鋏を掴んでしまえばよかったが、肩口が画鋲に抉られた痛みにとらわれ隙を逃してしまっていた。
さっき避けることができたのはほとんど奇跡だ。たまたま身体を流した位置が鋏の通り道ではなかったというだけのこと。
机・壁・窓・日名に囲まれもう八方塞がりだ。

「ごめんね……」

日名は鋏を再度築に向けて構え1歩下がると、強く床を蹴り築に突進した。

「おぉぉぉぉ！」

塞がれているならば崩すしかない。築は自分の机も前の机も強引に身体全体を使って蹴散らし日名の攻撃から逃げた。

「きゃあぁぁぁぁ！」

目標を失い止まることができなかった日名は勢い余って開いていた窓に突っ込んだ。

「はぁはぁ……、ヒナちゃん？」

荒い息遣いで振り返るとそこに日名の姿はなかった。

第１０話　恋はスリル・ショック・サスペンス

西康生高校の校舎は少々特殊な造りをしている。４階に１年生の教室、３階に２年生、１階に３年生の教室があって２階には特殊教室が集まっている。受験生になりえる３年生に配慮した造りなのだ。

何階であっても１階以外から落ちれば怪我だけでは済まされないだろう。下手をすれば死ぬ可能性だって十分にある。

「ヒナちゃん！！」

慌てて窓に駆け寄った。

「うぅ……、きずき……くん……」

日名は両手の指先だけで辛うじて窓の出っ張り部分にしがみついていた。

日名の目には大粒の涙が浮かんでいる。それもそうだ、ここは３階だし地上はコンクリートで舗装されている。手を放すことは死ぬ事に直結しているこの状況ならば、男ですら泣いてしまっても不思議ではない。

「絶対に手ぇ放さないでねっ！　今引っ張るからっ！　くっ……」

日名の細い手首を掴む。力を込めれば折れてしまいそうに華奢だ。

汗が肩の傷に染みる。この季節に染み入るのは蝉の声だけにしてほしい。

「きずきくん……、何でわたしを助けようとするの？　わたしきずきくんを本気で殺そうとしたんだよ？　冗談とかじゃなかったんだ

よ？」

「ちょっと黙っててくれないかな？　集中できない……」

「黙ってくれって……、質問してるんだよ？　ちゃんと聞いてよっ！　何で殺人犯のわたしなんかを助け……」

「うっせーな！！　そんなの今はどうでもいいから早く上がってこいよ！！　俺1人で引っ張りあげたいけど、俺にはそんな筋力とかないから！！　早く上がれって！！」

「っ！　う、うん……」

築に催促された日名は、足を掛けて壁を上る。築は日名の手首をしっかりと掴み後ろに引っ張った。

「きゃっ！？」

力加減など考えずがむしゃらに日名を手繰り寄せていたので、壁を上り切り力を緩めた日名に気付かなかった。日名は築の胸元に抱き寄せられるようにしてぶつかった。

築は背中と尻を床に打ち付ける。

「痛ぇ……。　うん？」

痛みが薄れて視覚に意識が集中し始め、触覚も復活した。

ふと見ると、自分の胸に顔を埋めて微動している日名の頭が見えた。手は日名をしっかりと抱き締めるように交差していた。

「うわっ！？　ごめん！？」

慌てて手を引っ込める。

「ヒナちゃん？」

「う……ぇぐっ……」

「……。　そのままでいいから聞いて、まぁ聞かなくてもいいけど。何で殺人犯を助けるのって聞かれたけど、助けられると思ったから。　目の前に救えそうな人がいたら俺は救う」

「……」

「てかヒナちゃん、殺人犯じゃないしね。　あとヒナちゃんだから助けた。　あれが豊田だったらニヤニヤしながら見下してたかもしれないよ？　ははっ」

無論、相手が豊田でも間違いなく助けた。赤の他人でも例外じゃない。築はそういう思考の持ち主だ、バカだけど。

「きずきくん……」

日名は涙でぐしゃぐしゃになった顔を築へ向ける。瞳は綺麗に澄んでいて、この女の子が自分の命を狙った被疑者だとは思えない程だ。

このままの体勢でいるのも男としては恐悦至極に存じるのだが、男には備わっていない柔らかい箇所で圧迫されていると、この場面にそぐわない下劣な感情が芽生えるのが男の性というものか。汚らわしいぜ、まったく。

「はいはい、いいからちょっと離れてくんないかな……。いくら俺でも女の子に抱きつかれてたら意図しない場所のテンションが上がりそうだし……。　その……、結構照れるし……」

「っっ～～！」

日名は夕焼け空のように顔を赤らめると、涙を拭い床に転がっていた椅子を起こしそこに座った。

築も立ち上がると、自分の机に腰を下ろした。

「何であんなことしたの？」

「ごめんね……」

「いや、もう謝らなくていいから。　その単語、俺の中で若干トラウマだから……。　で？」

「ごめっ……じゃなくて……あぅ、ごめんなさっ……。　『駒』を……殺せって言われたの」

殺人教唆というものであろうか、それならば日名に殺人を命じた人間は殺人罪と同格の罪に値する。

「その『駒』っていうのが何なのかイマイチ分からないけど、誰に言われたの？」

「異世界の人」

「異世界？」

「そう。　きずきくんが昨日出会った謎のおばあちゃん、その人もたぶん異世界の人」

「信じられないけど、信じたことにする、うん。　それで？」

「わたしにきずきくんをその……殺せと言った人が言うには、異世界人と接触し『駒』となった人をこの世から消さないと、この世界は崩壊するって……」

「世界が崩壊ねぇ……」

全く理解不能だった。その異世界人の命令に従順な日名のことも、そもそも異世界のことだって理解し難い。

日名が本当の事を言っているとは思えない。かと言って嘘を言ってるようにも見えない。でも信じないとすると、日名は正当な理由無しで襲ってきた事になるのではないか。流石に白昼夢では処理不可能だろう。

とりあえずここは三十六計逃げるにしかず。いくら美少女でも殺人未遂犯、すごく元気でも被害者モドキしかいない教室なんて居づらいし、両者とも疲労困憊気味であった。

「やっぱりよくわかんないやっ！　とりあえず家に帰るわ、俺」

「え？　でも……」

「あー、再テスト大変だったなー！　こんな時間までテストに追われるなんて最低の貧乏クジだー！　こけて怪我もするし前後賞も災難かよー！　でもまあいっかー、何事もなかったしー！」

築は誰に聞かせる為でもなくあざとく大声で言うと机から飛び下

りた。
何も無かったことにするという行為がいかに難しいことであろうか。恐怖や衝撃を受けた事柄は記憶に深く刻まれる物であってそうそう簡単には忘れられない。
有言実行が苦手な築は「忘れる事にする」と直接口には出さず、そうすることでこの場を逃げたのだった。

「きずきくん……」

日名はただぽーっと、築の背中を眺めた。

第１１話　潜む真の心を知るわ

肩の傷は折れた画鋲が原因だけあって深くはなかったが、範囲が広かった。
ワイシャツも血の水玉模様が浮かんでる上に破れている。
「はぁ……。　絶対に怒るよな、母さん。　昨日今日で制服の上下セットを駄目にしたら当たり前か……。　てか何て言い訳しようかな……」

遠くを見るように廊下の窓から外を一望すると、グラウンドを縦横無尽に駆け回る運動部員の姿が確認できた。一般人の存在がこんなに安心する材料になるなんて始めてだった。
日名が落ちかけた窓は裏庭に面していたので目撃者は皆無だろう。
これが逆側の窓だったならば、大惨事になっていた。女の子が、窓から身を投げ出して落ちそうになっているのがグラウンドからは丸見えだったのだから。
築は部活動は行なっていない。学業に集中する為と綺麗事を言って、実はめんどくさいからというのは隠していた。部活動に熱心な人というのは勉強にも熱心であるのだが。
そんなこんなで、これ以上校内に留まっても仕方がないので家に帰ることにする。
日名のことが気になったが、あの場を逃げ出したのは自分だ。今さら蜻蛉返りすることもないだろう。
玄関で靴を履き替え駐輪場へと向かう。ランニングする生徒の姿が見えたり吹奏楽部の演奏が聞こえたりと今となっては実に平和な放課後である。
自転車に跨がり、吹き付ける生暖かい風を全身に浴びながら家に帰った。

家の敷地内に駐輪する。

「おぉ、お帰り」

ラジオで野球中継を聞きながら庭の草を刈っていた祖父が、蚊に食われた腕にバツ印を刻みながら言った。

「ただいま、じいちゃん。　勝ってる？」

「まだ始まったばっかりだわ。　一緒に中継見るかや？」

「晩飯までならいいよ。　後でじいちゃんの部屋に行くね」

「おぅ、待っとるから早よ来りんよ」

厳の部屋は、矢作橋家の敷地の中に離れという形で建っていて、廊下で繋がっている。

ご飯の時以外は基本的に部屋にいる。

「ただいまー」

家に入り、着替える為に自室へ入った。

「痛つつ……」

ワイシャツを脱ぎ捨てると、汗ばんだ肌に浮かぶ一筋の傷。凝視するとなかなかにグロテスクだ。血を見ただけで気を失ってしまう人がいるのも頷ける。

「うわっ……しみるっ」

消毒液が活発に滅菌作業しているのが伝わってくるようだ。
大型の絆創膏を適当に貼り付けて祖父の部屋に向かう。廊下を抜け祖父の部屋の障子戸を開けた。

「おぉ、きずき。　早よ座りん」

「待っておったぞ……」

「え……」

厳の対面に座って湯呑みを傾けていたのは、昨夜に遭遇した謎のババアだった。

「え、えぇ！？　何であんたがここにいるの！？　てか、じいちゃん！　この人誰だよっ！？」

「はぁ？　何をわけのわからんことを言っとる。　お前のばあちゃんの黎さんじゃないか」

「ばあちゃんなんてとっくの昔に死んだじゃん！　どうしたのじいちゃん、ボケちゃったの！？」

「失礼なこと言うな、じいちゃんはまだボケとらんよ。　それよりも黎さんが死ぬわけないだろう、ここにいるんだから」

「ふぉっほっほっほ」

謎のババアは甲高い声で笑っている。

「え、もう、何言ってんのじいちゃん！　てか、え？　えぇ！？」

築は混乱する。

テレビに映っている贔屓のチームが、まだ1回裏だというのに二死三塁からスクイズをした事に対する物では当然無い。

「巌さんや、ちょっとこやつに話があるんで席を外してもらっても宜しいかの？」

「あ、あぁ。　それじゃあリビングにでも行ってようかの」

巌を見送ると謎のババアは語り始めた。

「驚いておるようじゃな」

「そりゃそうでしょうよ！　何であんたが俺のばあちゃんになってるんだよ！？　また魔法とかわけのわからん物を使ったのか？」

「魔法なぞ使っとらん。　儂はお主が生まれる前から矢作橋黎として生き、今に至る」

「はぁ？　そんなわけないだろ……。　俺が生まれた時にはばあちゃんは他界してたし。　実際、何回忌かの法事とかもやったし……」

仏壇だって毎日拝んでいたし、遺影だってある。

「それもまた事実であって間違っておらん」

「はぁ？」

「儂が矢作橋黎として生きていた世界を甲とする。　矢作橋黎が死んでいた世界、つまりお主の記憶にある今までの世界を乙とする。　甲乙は限りなく似ておるがそれぞれ別次元の別世界なのだ」

「……？」

「昨日の夜、儂はお主に対して時止めの魔法を使い儂の正体と目的を話した。　その瞬間、別々だった世界は繋がったのだ。　儂の行為が２つを繋げる鍵」

「それじゃあ、今までの航とかはどうなるんだよ？」

「もう居らぬ。　儂とお主が出会った以降から乙に生きていた人間の未来は消え、甲に生きていた者に吸収合併された、お主を除いてな」

「……？」

築は腕を組み明後日の方を見ながらキョトンとした。

「マジでめっちゃ頭悪いなぁ、お主。　とりまそういうことだから現状を受け入れろ。　儂は矢作橋黎なの、わかる？　そこんとこ理解しろ」

黎は懐からタバコを取り出すと火を点けてふかし始めた。

「は、はぁ……。　わかりました……。　それで、何でそんなめんどくさいことするんすか？」

「ふぅー。　儂が暮らしておった世界で戦乱が起きた。　だが、各

々戦局は拮抗し目的である領土の拡大もままならない。　そこで各国はこの世界の支配を企てた。　しかし、異世界人による直接的な侵略は御法度となっておる。　そこで我らは代理になる『駒』をこの世界の人間から選び、間接的に干渉することにした。　『駒』となった者の数は儂にも把握できぬ、が、敵国の『駒』の『王』たる者を全て消せばこの世界の支配権は我が国の物となる」

黎は紫煙を燻らしながら語る。
時々煙をこちらに吹き掛けるのはやめてもらいたい、すごい腹が立つ。

「さっきから『駒』って言ってるけど……。　やっぱ俺はその『駒』に選ばれたってこと？」

「『王』」

「あん？」

「お主はただの『駒』ではない、『駒』の『王』じゃ」

「勝手に選ぶなってぇぇぇ！！　それって命とか狙われちゃうってことだろ！？　何で何の能力とかない俺を選んだぁぁぁ！？」

実は隠された能力を持っていた、ということか。

「気分じゃ」

「はぁっ！？」

「だから気分で選んだ。　儂に気分で選ばれるなんてそれだけで『

王』の資格は十分にあるのじゃ、誇ってよいぞ」

これは衝撃の事実発覚だ。

あと王ポジションなんて大切な物を、今日着ていく服感覚で選ぶなんてどういう神経しているのだ。

「前にも同じようなこと言われたけど誇れんわっ！！」

「まあそんなところじゃ、わかったかの？　他国の『駒』も流石にまだお主が『王』とは気づかぬじゃろうし、のんびり行くかの」

「……」

本日クラスメイトに殺されそうになったことを言うべきか迷う。しかし、あの場は収まった感があるし再燃させることも無いと思ったので黙ることにした。何より日名は『王』とは一度も言っていなかったし、とりあえずは大丈夫だろう。

「お義母さんー！　きずきー！　ご飯ですよー！」

どうやら晩御飯の時間が来たようだ。

「それじゃあ行こうかの、きずき」

「気安く呼ぶなよっ！　ババア！」

築はスタスタと1人で食事に向かった。

第１２話　素直にお喋りできない

リビングに着くと、父と祖父が野球中継を見ながら互いに熱弁を奮っていた。
天寿を全うされたブラウン管テレビに代わって、最近やってきた薄型ハイビジョンテレビは白熱した試合を美麗映像で茶の間に届けている。スポーツもバラエティも変わらぬ美しい映像で送っているこのテレビは１番の働き者なのかもしれない。縁の下の力持ちとはちょっと違うが。
そんな中、航は人知れずキッチンから食卓まで料理を運搬していた。

「ちょっと兄ちゃん、手伝ってよ！」

「はいよー」

兄だけサボることは許されなかった。
東は一番テレビが見やすい位置でもある上座、その左隣に築・航、右隣に巌・黎、優はキッチンに近い下座という配席である。長方形をしたダイニングテーブルはこうしてバランス良く埋められていた。
黎の席は最もテレビが見づらいので一昨日の夜までは空席になっていたはずなのだが、今は黎と名乗る老婆が鎮座している。
その光景に、築を除いた家族は何ら不審がることもなく、よく効いた冷房のもとに暖かな食卓が広がっていた。

「いただきます」

「いただきます」

一家の大黒柱の号令で晩御飯はスタートした。
今日のメニューは大皿に盛られたみんな大好き唐揚げ、小皿に取り分けられたサラダ等。
航の目の前に調味料が集中して置かれていることはとても便利なので喜ばしい。

「きずき、マヨネイズをとっておくれ」

マヨネーズは航の手元にあるのに、黎はわざわざ築に頼んでくる。

「だから気安く呼ぶなって！　航の方が近いんだから航に頼めよ！」

「兄ちゃん、何怒ってるの？　それくらい取ってあげなよ。　はい、おばあちゃん！」

「ありがとう、航」

「……」

築は手渡されるマヨネーズの赤色のキャップをジトッと一瞥し、唐揚げに箸を突き刺しかぶりついた。

「きずき、刺し箸は御法度じゃぞ？」

「モゴモゴ……。　うっふぇーな！　ふぇふにいいふぁろ！」

「きずき、口に物を入れながら喋ってはならぬ」

「はぁぁ！？　ババアがいちいち俺に喋りかけてくるからだろうが！！」

築にとっては、見ず知らずの人に食事マナーを指摘されている感覚であって、鬱陶しいことこの上ないのだが。

「きずきっ、何よその態度は！　お義母さんに向かってそんな口の聞き方して！」

「父さんもお前が怒る意味がわからん。　いい加減にしないと、父さんも怒るぞ」

「そうだよ兄ちゃん。　どうしたの？」

「くっ……」

マイホームなのにアウェイって。ホームの球場で戦う我らがチームのサポーターの多いこと多いこと。スタンドは我らがチームのシンボルカラーたる水色のユニフォームやタオルでいっぱいだ。普通はホームといったら、テレビに映っているように過剰贔屓されるものなのに。

「……ババア、あれだろ？　みんなを懐柔する魔法とか使ったんだろ！？　おかしいもんっ！」

「……」

家族全員の可哀想な物を見る目が築に集中する。

「兄ちゃん？　頭でもぶつけた？」

「きずき……、あんたどうしたの？　病気？」

「学校で嫌なことでもあったのか？」

今度はひどく気遣われる。いたって健康なのに心配されるなんて、一周回って嫌味に聞こえる。

中継に釘付けになっている祖父の立場が羨ましい。

「もういいや……。　うん、ごめんなさい、俺がおかしかったです……」

家族の中での自分のの立場が危ぶまれつつあったので築は冷静になることにした。

冷めた食べかけの唐揚げは、なんとも味気なく感じた。

ひっそり食事を終え自分の部屋に戻り、ベッドに身を投げ天井の継ぎ目を無意識に追う。

満腹になったはずなのに、空腹時に湧くような虚無感はなんなのだろう。野球中継なんかもうどうでもいい、ババアのことはもうどうしようもない。今の現実を受け入れるしかないのか、それとも現実逃避行を無理矢理敢行するのか。

もうどうしたらいいのかわからない。今日からこの人が新しいお母さんだよ、といわれた子供はこんな気持ちになるのだろうか。

なんだかんだ言って結局は受け入れざるを得なくなるのが世の常なのだろうか。

「おわっと！？」

不意にポケットにしまっていた携帯が震えた。ディスプレイには番号が表示されている。

メールではなく電話だった。

嫌な予感しかしなかったが、通話ボタンをプッシュし耳に当てる。

「もしもし？　矢作橋築ですけど。　ごめん、誰？」

「こんばんわです。　急に電話してごめんねっ！　あの……、日名桜子です」

「ヒナちゃん！？　こ、こんばんはっ！　どうして番号知ってるの？」

挙動不審になってしまうのは仕方ないだろう。いくら電話越しでも相手は女の子だ、面と向かってでなくても緊張するし、まさかの不意打ちだったし。数時間前に言葉通り不意打ちされたが、笑えない。

「梨華さんに教えてもらったの。　今時間大丈夫かな？」

刈谷の名前がでて少しホッとしてしまった自分がいた。もし豊田や他の男の名前がでていたのならば、様々な疑問にやきもきするところであった。

「うん、大丈夫だよ」

「良かったぁ。　……今日はホントにごめんなさいです。　謝って許されることじゃないけど……」

「何か謝られることあったっけ？」

「きずきくん……、ありがとう。　それでね、きずきくんに伝えたいことがあります……」

「え……？」

母みたいに1トーン上がった声でなく、日名のおっとりした地の声にはグッとくるものがある。今度こそ告白が来るのか。

「きずきくんは……、これから命を狙われることが頻繁に起こる。貴方が『駒』の中でも重要なポジションであるという話が流れてるの。　デマかもしれないけど気をつけて欲しいんです」

「あ、うん。　ウチに来たよ、この前言ってた謎の異世界ババア。なんか同じようなこと言ってた」

事後に説明されても遅かったが、さっき聞いたことだ。

「えっ！　……そうなんだ。　それでね……」

「うん？」

「わたしは……、きずきくんを守りたいなって……。　おこがましいかもだけど……」

話が飛躍している気がした。なぜそんな結論に辿り着いたのだろう。

築は携帯に耳を強くあてて問う。

「うん？　どうして？」

「わたしは、きずきくんのことが……。　……。　わたしがきずきくんを狙ったのは、わたしと繋がりのある異世界人のミスだってことが判明して」

「……」

ミスで殺されそうになっていた過去の自分にがんばったで賞を進呈したい。

「わたしはあのまま見捨てられて死んでしまっても文句は言えないことをしてしまったのに、きずきくんは救ってくれた……、身も心も」

別に罪滅ぼし的なことなど望んではいない。それは彼女にとって枷となるのではないだろうか。

「気にしないで。　ちょっと急用ができたからもう切るね。　おやすみ」

もちろん用事などない、あっても風呂に浸かることくらいだ、予習復習なんていつでもできる、今日はやらないけど。

「うん……、おやすみなさい」

別れの常套句を聞いた築は携帯を折りたたみベッドに置いた。

「言えなかった……。　わたしってホントに……」

日名は誰もいない発信先に向けぽつりと呟いた。

「あれは、告白……、じゃないよなぁー？」

天井の継ぎ目の数をどこまで数えた忘れてしまっていて、築は再

び端からそれ数え始めた。

第13話　なんでこんなに可愛いのかよ

無意識に天井の継ぎ目を数えていた築は睡魔に襲われた。
等間隔に同じことを繰り返すと眠くなる。数が増す羊、揺れる電車、高速道路のライト、いわゆるハイウェイ・ヒプノーシスというやつだ。
どれくらい眠っただろう、目が覚めるとそこは異世界だった、なんていう実際は無いだろうが、そんなゲームやノベルスでありがちなことなど起きてなく、目に映るは平和な自分の部屋だ。
異世界から来たという謎のババアと血縁関係になっていた、という新事実も創作物であって欲しい。
壁を向いて寝ていた築は、携帯で時間を確認しようと反転した。

「お目覚めか、きずき」

「うわぁぁぁ！？」

そこにはババアが立っていた。
気配を殺すとかそんなレベルじゃない、部屋に点在する机や本棚と同様に存在感が感じられなかった。
こんなことは初めてだ、寝込みを襲われるなんて不覚。

「先ほどの電話は、ホレ、これかの？」

小指をピンッと立てた。

「違うわっ！　盗み聞きとか最低なんですけどっ！　クソババア！」

「バカみたいに廊下まで響き渡る声量で話すきずきが悪い。　いい

のかの？　儂をそのようにないがしろにして……」

ババアは顔の影を強める。というか、このババアの顔をまじまじと見たことが無いのだが。

「な、なんだよ？」

「告白などと言うておったな。　それをみんなにばらすぞ？　特に航に重点的にな」

「陰湿なんですけどっ！　やめろよ！　航とか変な誤解するだろうが！　……お願いします、許して下さい」

「儂の言うことを聞けば許さなくもない」

知らず知らずババアの誘導に引っかかっていた築である。

とんでもない無茶を言う気しかしないのだが。

「わ、わかりました……。　それで何を聞けばいいのでしょうか？」

築は恐る恐る尋ねた。

不可能なことでなければいいのだが、このババアのことだ、とんだ無理難題を吹っ掛けてくるに違いない。

「儂のことをババアと呼ぶのをやめて欲しい」

「へ？」

ババアの口から飛び出したのは、築の予想を遥かに超えた簡単な願望であった。

「きずきは勘違いしておるかもしれんが、儂はきずきの敵ではなく、唯一無二の最大の味方なのじゃぞ？」

「……だからって、いきなりやって来た見ず知らずのババアを何て呼べばいいんだよ？」

「儂の知っておるきずきは、ことある毎におばあちゃんおばあちゃんと言っておったわ……。　それが今のきずきは……うぅ」

ババアはそう言うと肩を震わせる。

これは築にとって強烈だった。

万引きという罪を犯した老婆を事務所まで連行してきても、そこで涙ながらに身の上話をされては無罪放免にしてもいいような気さえ起きる。

もちろん、犯罪者は犯した罪相応の罰を背負うのが当たり前だが、それほど年老いた女性の口上は強力なのだ。

「ばあちゃん……、これでいいか？」

「きずき……」

黎にとっては感動の再開と言えなくもない状況だ。

黎はおもむろにフードを外し、築に顔をさらした。

「っっ！」

そこに現れたのは紛れのない矢作橋黎、写真でしか見たことなかった今は亡きばあちゃんだった。

何故今まで気付かなかったのか、なんて愚問だ。死んだ筈のばあ

ちゃんが、正体を隠して舞い降りるなんて思いもしない。

「勘違いするでないぞ？　儂はあくまで異世界の住人。　黎だが黎ではない、この曖昧模糊な存在こそ異世界の住人たる所以。　儂はきずきに生きてもらわねば困る……、『駒』として、孫として……」

「マジでばあちゃん！？　……ていうか、正体ばらすの遅ぇよっ、何で今さら正体ばらした？」

「バカなきずきのことだ、いきなり正体を明かしたところで結果は同じだったと思うが？」

「うっ……」

確かに黎の言う通りだ。いきなり黎の顔を見たとしても、ばあちゃんに超クリソツな人と出会ってビックリ、くらいにしか思わない。世界には自分と酷似した顔を持つ人間が3人いるというし、三十三間堂の中にある仏像にもクリソツな奴がいる、足して4人だ、などとバカな理論を展開していただろう。

「結果は同じと思ったからの。　ぶっちゃけ儂はどっちが先でもよかったのじゃが……」

「あ、そうっすか」

どうしてそんなバカな策を、『駒』しかも『王』に気分で選んだのか謎は深まるばかりだ。その経緯も結局は五里霧中である。

「せいぜい死なぬように頑張るのじゃぞ」

「そんなこと言われてもどうしたらいいのかわからないし……。そうだっ！　アレないのアレ、魔法使いと契約したら魔法が使えるとか、伝説の武器が操れるとか！」

異世界人が親族になったのだ、それくらいの恩恵は得たい。

正直なところ、丸腰状態で襲われたらひとたまりもない。

「残念じゃが、漏れなくそんな物は付いてこぬ。　自力で対処するのじゃ」

「死ぬ気しかしないんですけどっ！」

時止めの魔法に対処できなかったのを知っているだろう。黎には言ってないが、日名にも逝かされかけたし。

「安心しろ、とは言えぬが儂もサポートする。　みすみす死なす訳にはいかぬからの。　儂ら異世界の人間は『駒』同士を闘わせることしか出来ぬのじゃ。　なに、難しいことなどない。　きずきは立派に十数年生きておるではないか。　それと同じことを文字通り死ぬ気で積み重ねればよいだけ、簡単じゃろ？」

立派に生きる、生きることは立派なのだ。死ぬまで生きることは命ある万物の目標であってゴールである。

問題はその過程、困難なのか安易なのかだ。

築は操作方法も分からず説明書も無いのに、ベリーハードモードを隣の奴に勝手に選ばれ早くやれよと急かされた、そんな気分だった。

消すのも悔しいので意地でもやる、ある意味で築は勇者だ。

「いいよ、わかったよ、頑張るよ！　やればいいんだろ、や・れ・ばっ！！」

「ほっほっほ、その意気じゃ。　必死に生きておくれよ、きずき」

黎は築の頭に皺が深く刻まれ年季の入った手を乗せそう言うと部屋を出ていった。

チラッと見えた横顔は、どことなく笑っていたように感じた。

第１４話　埋もれた真実、この掌で

黎が部屋から去った後、壁を見つめ少し呆けてから風呂に入った。
肩に貼っていた絆創膏の撥水効果は抜群で、ボディーソープやお湯が傷口に浸透することはなかった。
冷蔵庫から麦茶を取り出して渇いた喉を潤し部屋に戻り布団に入る。
朝起きたら異世界に飛ばされて、みたいな可能性も捨てきれないので用心して目を閉じた。
世界広しと謂えども、自分が神隠しに遭うのを警戒して眠る人なんてまずいないだろう。警戒したところで防ぎようがないのだが、そういった心持ちが大切だ。うん、寝よう。
トンネルを抜けるとそこは雪国でも異世界でもなく、慣れ親しんだ自室の天井だった。
今日も今日とて目覚ましよりも早起きだ。
変わらぬ日常に安堵の息をつき、学校に行く準備を済ませる。
昨日の朝と全く変化のない一連の行動。この流れが卒業まで当たり前のように続くと思っていたのに。
でももしかしたら、一晩眠れば何事も無かったかのように平凡な日常の軸に立っているかもしれない。
築は一縷の希望を持ってリビングに入った。

「おはよう、良い朝じゃの、きずき」

「……おはよう、ばあちゃん」

日常から非日常に進路変更されたレールの上を爆走中だった。
そんな築でも黎の姿を見ても露骨に嫌な表情を浮かべない程度には成長していた。

東は早朝出勤、巌は老人会の催しに参加している為に食卓に姿は無かった。

「おい航。　マグカップ持ったまんま寝るな、溢してもしらねーぞ」

「あ〜〜う〜〜」

珍しく築より先にテーブルに着いていた航は、生きる屍同然だった。

「きずきー？　あんた昨日着てたワイシャツはどうしたの？」

洗濯籠に築のワイシャツが無いことを不審に思った優は、腕を捲りながら築に聞いた。

「え……。　いや、その……」

「早く言いなさい」

「気づいたらありませんでしたっ！」

目を合わせたら石になりそうだったので、やや視線をそらし築は答える。

「あんたまた他の学校の生徒さんと喧嘩したの？　何枚目よ、制服破ける の？」

「記憶にございません」

主に他校の生徒にいちゃもんをつけられ絡まれるのは築だったが、

それを買い肉弾戦に持ち込むのは連れの豊田だった。
豊田がなかなかの豪傑だったので、築はそれほど己の拳を血に染める必要はなかったが、少なからず被害も受けていた。今回はそれが原因ではなかったが。

「停学とか謹慎にならないようにほどほどにするのよ。　それと、あんたのバイト代で制服買うのよ、いいわね？」

「くっ……、わかりました」

「く～た～び～れ～も～う～け～」

航のことは軽く無視して朝食を平らげ歯を磨く。食前に歯を磨く方のが良いらしいが、食事の味がシトラス風味になるのが嫌だってのでいつもそうしている。
寝癖をワックスで適当に誤魔化す。豊田なんかは髪型の創作に時間をかなり費やしていそうだ。きっちり決まらないからと言って欠席する可能性すら否定できない。

「おーい！　きずきー！」

そんな豊田の声がした。

「おーい！　ちっくんー！」

豊田に続いて刈谷の声までした。

「え、刈谷？」

豊田が朝迎えに来てくれることは日常茶飯事だったが、刈谷が来

ることはかなり珍しい。一緒に登校することはあったが、信号待ちをしていて偶然遭遇した時だけだった。
世話焼き幼なじみ美少女でもないのに、女の子が男を迎えに行くなんてただ事ではない、築はそう感じた。
黎がご健在の今、仏壇なんか拝む必要がなくなったと言えばご先祖様にどつき回されそうだったが、祈りを捧げる意義が見い出せなかったので仏壇はスルーして玄関に向かう。

「死ぬなよ？」

「不吉なこと言うなよ！？　戦争に行くわけでもないのに」

「人生はいつも戦いじゃ」

「うっせーよ、クソババア！」

ひょっこりお見送りに来ていた黎に不意にそう言われ盛大に低レベルな反論をする。

「ぐっどらっく」

「……行ってきます、ばあちゃん。　航が遅刻しないよう起こしておいてね」

「任された」

生きたばあちゃんに行ってきますと言うのは新鮮でどこか小っ恥ずかしかった。別に嬉しくなんてないんだからね。

「おっせーよ、きずき。　俺は待つのも待たせるのも嫌いなんだ」

「えー何それー、超自己チューなんですけど」

「お前を永遠に待たせてやろうか？」

「行かないもん、だから光ちゃんは死ぬまで待ってれば？」

元気で賑やかなのは良いことだが、ご近所様に多大な迷惑を被らせることはいただけない。

「うるっさいんだよバカ共がっ！　朝っぱらから俺ん家の前で喧嘩すんなっ！　ふぅ……、ていうか梨華、どうした？」

豊田と刈谷の小競り合いなどどうでもいい。重要なのは豊田と舌戦する相手、なぜ刈谷がここにいるかだ。

「うーん、それはねー」

刈谷はニコニコしながら後方を向くと、人差し指をクイックイッと曲げて何らかの合図をした。

「あっ、あのっ！　きずきくん！」

「え？」

刈谷の指し示す方角にあった電柱の後ろから姿を現したのは日名桜子だった。

「ヒナちゃんがねー、ちっくんと登校したいって言うからさー、連れてきたの」

「びっくりさせてごめんね！　きずきくんを守りたくて……」

日名がそう言った。同時に豊田・刈谷両名の目つきと色が変わる。

「あーあー、こちら豊田。　返事をどうぞー、ジジー」

「ジジー、あーあー、こちら刈谷、電波良好。　オーバー」

その手で表現しているのは見えない無線機かトランシーバーか、音だだ漏れなんですけど。もっと喧嘩してればいいのに、止めたのは自分なのだが。

「卑劣漢きずきがあのような可愛らしい女の子に守りたいと言われるとは、彼女を傀儡と化しているとしか思えない。　情報を求む、オーバー」

「あーあー、昨夜日名嬢から卑劣漢の携帯番号を教えて欲しいと連絡があった。　刈谷が推測するに、昨日の放課後に何やら興味深いイベントがあったと思われる、オーバー」

この2人はわかっててやっているのだろうか。もしかしたら目撃されていたのかと思うと冷や汗が背中を垂れた。

「……」

「きずき何してる。　お前の番だ早く答えろ、オーバー」

豊田と刈谷は興味津津といった表情を浮かべている。どうやら楽しんでいるだけのようだ。

築はエア無線機を作る。

「こちら卑劣漢、遅刻するぞ。　バカはほうっておいて学校に行こうヒナちゃん、オーバー」

「お、おーばー！」

築と日名は２人をスルーして進み出す。４人で学校に行くとなると、自転車では大変なので公共交通機関を使わざるを得ない。

強引に肩を組んでくる豊田が暑苦しい。

刈谷も日名に絡みついた。

こうして４人は電車で学校に向かうため地元の駅へと歩きだした。

第15話　迫るー

曇天だった。空は今にも大泣きしそうである。

「豊田ぁ、いい加減離れてくれないか……。　暑いんですけど」

「なんだよきずきぃ、ノリ悪いな」

自分も暑いくせに離れようとしない豊田。汗を垂らしながら歩きにくいのも我慢して絡むとは、他人の色恋沙汰というのはそこまで人を熱心にさせてしまうのか。

「ヒナちゃーん、もうだめぇー、暑いぃぃ……」

暑さに耐えかねた刈谷は歩きながらシャツの上に着ていたベストを脱ぎ始める。

「危ないですよ？　止まって脱いだ方が……」

「大丈夫大丈夫！　……あ」

「どうしたんですか？」

刈谷は急にその場に立ち止まった。

日名も心配して聞く。

「つけてくるの忘れちゃったみたい、あははー」

「何をつけるの忘れたの？」

「ブラ」

「……。　梨華さん！　ベスト着てくださいっ！　透けちゃいますっ！」

「あっはっはー」

刈谷は笑っているだけで脱いだベストを再び着ようとはしない。
下着装着を忘れた本人よりも日名が一方的に大慌てだ。
先を歩いていた築と豊田も、後続が来ないのに気付き振り返り声をかける。

「おーい、梨華ぁー、ヒナちゃーん、どうしたのー？　置いてくよー」

「何をしているんだ」

様子を窺いに豊田が引き返してくる。

「下着つけてくるの忘れちゃいましたっ！　ごめんなさい！　ちょっとこっちに来ないでくださいっ！」

「お、おう」

日名の叫びを聞いて豊田はまた引き返す。

「ちょ、ちょっと、ヒナちゃん？　あたしは大丈夫よ」

「大丈夫じゃないですっ！　早く着てください」

「うぇ……、暑いから別に……」

「梨・華・さ・ん？」

「う、うん！　すぐ着るっ！」

訴えかける日名の視線に刈谷は屈し、大人しくベストを着た。

「豊田、あいつらどうした？」

「日名さん、ブラしてくるの忘れたらしい」

「ありがとう」

勘違いした男連中は再び駅へと向かい、女子も後を追った。
朝の駅はどこから湧いたのかと思ってしまう程に人でいっぱいだ。
旧国道前駅（キュウコクドウマエエキ）は乗降者数など首都圏の駅の足元にも及ばない無人駅である。しかし車での通勤がメインである地方の私鉄駅でも、築達の様に通学に利用する者や都市部へ通勤する者などで賑わう。
今日はあいにくの気象からか、電車を使う人が多いようだ。
島式の構内は、前の電車が発車した直後だったので人はまばらだった。

「ちっくんちっくん、一番前に並べば座れるかも。　早く行こっ！」

「座れるって……、１駅だけじゃねえか」

冷房の効いた電車にもうすぐ乗れるので刈谷のテンションは高い、朝っぱらから高かったがそれ以上だ。

改札を通った刈谷は軽快なステップで先頭を奪取した。刈谷を挟むようにして築と豊田、築の後ろに日名が立つ。
築達の後ろには後続の人々が列を成した。
「間もなく、都心部方面行き普通電車が参ります。　危ないですので、白線の内側までお下がり下さい」
後ろで待っていた日名の胸元を気にしていると、アナウンスが流れた。
駅の真横にある踏切の遮断機がおりる際の警告音が聞こえ、徐々に近寄ってくる電車が遠くに見えた。
「ふぅ、やっと来たー。　座れますようにっ！」
「喋らないと思ってたらそんなこと願ってたのか」
「いいじゃん、どうせ涼むなら座ってたいじゃん？」
「気持ちはわかるけど、なんかバカっぽい」
「うっさいなぁー。　それで……」
その時だった。仲良く話していた刈谷の声が急に途絶え前方に吹き飛び築の視界から消えた。
「梨華ぁぁぁぁ！！」
刈谷は停車しようする電車が迫るホームに落ちたのだ。
その光景に周りは騒然とする。
すぐに設けられている退避スペースに潜り込めば問題ないのだが、

刈谷はその場に突っ伏したまま動かない。

「おい！　何してんだ梨華！　早く逃げろ！」

築は声を張り上げ呼びかけたが応答はない。落ちた時の衝撃からか軽い脳震盪を起こしていた。

駅員も居らず周囲の人間も滅多に起きないアクシデントにうろたえ声を上げるのみで冷静な対処がされない。

列車は事態に気づかぬまま進行してくる。

「クソ！！」

築は鞄を置く。

「きずきくん！　危ないよ！」

築が何をしようとしているか感じ取った日名は、築のシャツの裾を掴む。

「放してヒナちゃん！　早くしないと梨華が！」

「ダメです！　わたしはあなたを守るのが……」

「いいから放せぇぇ！！」

「きゃっ！」

日名の手を強引に振り解くと、築は線路へ飛び降りた。

「梨華！　梨華！　おい！　クソ！」

身体を起こして揺すり問い掛けるが、刈谷からの返答は無い。しかも強く頭部を打ち付けたらしく、真っ赤な血が額をつたっていた。
そうしている間にも電車は刻一刻と迫ってくる。
築は刈谷を抱きかかえる。両腕に刈谷の全体重がのしかかる。刈谷が見た目よりも幾分か軽かったのが救いだった。あとで体重は何キロあるのかどさくさに紛れて聞こう。
後はこのまま背後にある退避スペースに潜り込むだけだ。

「よいしょっと……。……。　くそっ！！」

刈谷を持ち上げ退避しようとしたが引き戻された。
刈谷が提げていた鞄のキーホルダーが線路の接合部に引っかかってしまっていたのだ。
無理やり千切ろうとするが、特殊な素材なのかなかなか切れない。
踏切の手前で異常に気付いた列車は警笛を鳴らし急ブレーキをかけるがそう簡単には停止できず、吸い寄せられるように構内に進行してきた。
刈谷を一旦置いてちまちまキーホルダーを外している時間などないし、今さら増援を呼んでも助けに来てくれる命知らずな人間なんていないだろう。
周りを気にしている暇などない築は、力を込めながら叫んだ。

「豊田ぁぁぁ！　来てくれぇぇぇ！」

「いいか、1回しかない、落ち着け。　せーので引っ張るぞ」

「豊田！？　おうっ！」

「せーのっ！！」

既にホームに降り立っていた豊田は築と共に刈谷を抱えると、号令にあわせて渾身の力で引っ張る。
列車が迫る中でのたった1回のチャンスだった。
強情だったキーホルダーは観念してプツンと切れた。

「早く退避スペースに！」

迫ってくる列車を間近で、しかも正面から見るなんてこんな怖いことはない。人を轢き殺す為に製造された兵器のように見えた。
悲鳴のようなブレーキ音を響かせた列車は、築達がいたところをゆっくりと通り過ぎ停止した。

第１６話　また誰か、乙女のピンチ

待避スペースは狭いし暗いし、おまけに劣化したオイルのような臭いが立ち込めていて、閉所恐怖症や暗所恐怖症の人ならば、堪えきれずに発狂してしまうかもしれない。

それよりも殺人兵器の様相を呈した巨大な鉄の塊によって、身体を寸断されそうだったと思うとショック死しそうだ。

「うぷっ……、ハァハァ……」

極度の緊張からの脱却。そのせいで朝食べた物が逆流しそうになった。

「豊田ぁ、ハァハァ……、生きてるかぁ？」

「おう、アイアムオーケー。　だが、ひどく疲れた」

「ははっ、そうだな。　死ぬかと思ったぜ」

普段から死にそうって言葉を何気なく用いていたが、本当の使い所はこういう場合にのみ当てはまるのでないだろうか。

「死ぬかと思ったということは、結果生きてるということだ」

「豊田のお陰だな」

「はぁ？　きずきのお陰で俺も刈谷も生きてるんだぞ」

「いやいやいや、豊田が来てくれなかったら」

「待てって、一番早く動いたのはきずきだろ」
お互い感謝を重ねるがどっちも引かない。どちらも優劣なんかつけらない程感謝していた。
そのせいで、言い争いに発展しそうな勢いだ。
「ふざけんなよ豊田。　お前のお陰で助かったに決まってるだろ」
「ふざけてんのはお前だろ」
「なんだとコラ、豊田のせいで生きてるんだよっ！」
「なんだそりゃ」
「ぷっ……、ははは！」
２人は固くシェイクハンドすると腹から声を出して笑った。
その頃構内は大騒ぎになっていた。
落ちた女の子も救出に向かった男２人も安否が分からない。
列車を退けたあとに待っているのは凄惨な景色かもしれない。
誰もがそう思い始めていた。
「こいつだ！　こいつが女の子をホームに突き飛ばした奴だ！」
周りの騒音をかきけすように誰かが叫んだ。
日名は声の方に耳を傾けた。自分の友達を殺そうとした人間がいたなんて。
「暴れるな！　もうすぐ駅の事業所員と警察がくる！」

「俺に触るな！　あいつは『駒』の『王』と共に世界を滅ぼそうとしていたんだ！　後詰の勢力の為に敵の『駒』を1人消したんだ！　俺は正義だっ！　俺は『駒』であり救世主だっ！」

「こ、こいつ頭おかしいぞ。　日本語か、これは？」

「お前たち一般人にわからない！　この世界が抗争によって消えるなんて思うまい！」

「？」

駅に居合わせたサラリーマン達に取り押さえられた怪しい男がそう熱弁していた。

しかし、サラリーマン達や彼らを取り囲む人々はその男が何と言っているのか全く分からない。言葉として届いていない。

ただただ理解不能な言語を声を張り上げて叫んでいる男を、周りの人々は汚い物を見る目で見ていた。

「……」

だが日名だけはその男が何と言っていたか全て聞き取ることが出来た。しかし言っている意味はわからなかった。

日名の知っている情報では、矢作橋築は異世界人と関わりを持っている『駒』だが、刈谷梨華は異世界人とは疎遠関係であり接触もしていないごく普通の一般人である。

どうして刈谷梨華を亡き者にしようとしたのか謎は深まるばかりだ。

直接あの男を尋問したかったが、殺人犯として捕えられている者と会話なんてさせてはもらえないだろう。

あの男のことがひどく気にかかったが、でも今はそんなことよりも築達のことが気になる。
自分の足元には築が置いていった鞄が残されていて、考えてもいないのに思いたくもないのにそれが遺品のように見えてしまう。

「きずきくん……」

築の鞄を広い上げるとそっと胸に抱えた。

「警察だ！　どいて下さい！」

到着した警察官や救急隊員、旧国道前駅の事業所職員が続々と構内にやってきた。
各々てきぱきと仕事を始める。
電車に乗っていた人々も構内にいた人々も心配そうな顔で作業を見守っていた。
やがて電車は警笛を上げ動き出した。

「おい、動き出したぞ」

「やっとか……」

眼前の巨大な車輪が回転し電車が動く。
やっとこの状況から解放されるみたいだ。

「梨華、大丈夫か？」

築は膝に乗せていた刈谷の身体を少し揺すってみた。

「うぅ……、んっ」

刈谷はもぞりと動き出し薄く目を開いた。
「刈谷、あまり動かない方がいい。　怪我してるみたいだし、きずきがお前を支えててくれるから大人しくしてろ」
「豊田の言う通りだ。　もうここから出れるからな」
「ちっくん……、光ちゃん……」
刈谷は再び瞼を閉じた。
目の前に止まっていた電車は完全にいなくなった。
上から救急隊員が続々と降りてくる。
「大丈夫ですか！　大丈夫ですか！」
「俺たちは大丈夫です。　こいつがちょっと怪我してるみたいなんで」
「はっ、了解しました。　生存確認！　生存確認！」
隊員達に刈谷を託すと築と豊田は立ち上がり、待避スペースから脱出し線路の上に立った。
２人の姿が現れると辺りは盛大なクラップハンズと歓声に包まれた。
「きずきくんっ！」
ホーム上から日名は築に声をかける。

「危ないから下がって下がって！」
「え、あ！？　ごめんなさい！」
ホームに降りてきそうな勢いだった日名は警察官達に阻まれる。
「ヒナちゃん……、はは」
警察官に取り囲まれて手足をバタバタさせる日名はとても可愛かった。
巨漢の警察官数人に制止されている小柄な日名の姿は、なにか別の犯罪に巻き込まれているように見える。
「なぁ、豊田」
「あ？」
「今日学校行かないとダメかな？」
「どうなんだろうな、わからん」
「2日連続で遅刻とか俺やばいんだけど」
「何がやばいんだ？」
「ほら、内申点が下がると進学に不利かなー、とか」
「ちょっと人の命を救ってたら遅刻しましたって言っとけよ」
「無理だぁ！　その遅刻理由何回か使ったことあるもん！」

そんなことを心配している築であった。

第17話　許せない

その後は大変だった。
負傷した刈谷に付き添って病院に行こうと思ったがそれは叶わなかった。
平凡な田舎での久しぶりの大事件だったこともあり、地元新聞社やローカルテレビ局の記者達に取り囲まれ、今の心境やら危険を省みずに人命救助に至った気持ちなど根掘り葉掘り聞かれた。
インタビューが終わっても息もつかぬ間に警察の実況検分に付き合い事情聴取をされ解放されたのは正午前だった。
自由を取り戻す為にかかった時間が早いのか遅いのかはわからないが、これから学校に行って午後からの授業を受ける体力や気力は残されていない。

「だりぃ……」

「あぁ、ダルいな」

人の命を救った場合による遅刻・欠席は無効とする、という表記は生徒手帳には見当たらない。
実際に入試に向かう途中の学生が、発作を起こした老人と遭遇し救助した為に試験開始時刻に間に合わなかったが、再試験は認められずに沙汰を待ったという話もある。
人命救助は人として正しい行為だが、自分の命や人生を賭けてまで実行することは推奨されていないのである。

「学校、サボっちゃいませんか？」

これからの登校に萎えていると日名がそんなこと言った。

「優等生の日名さんがそんなこと言うなんて思わなかった」
「確かに。　でもいいのヒナちゃん？」
日名の提案はかなり魅力的だった。
築と豊田は半ば優等生の日名が一緒にいるので無理してでも学校に行くつもりだったのだが。
「はい！　たぶん学校には警察か消防から連絡が入っていると思うので、事情は把握しているかと」
「なら決まりだな、もう昼だし」
「腹減ったー、せっかくだし何か食いに行こうぜ！　それでいいかな、ヒナちゃん」
「はい！　お供します！」
こうして3人は市街地にあるショッピングモール・康生タウンに向かった。
康生タウンはショッピングスペースやアミューズメント施設等がある巨大複合施設である。
若者が遊びに行こうご飯食べに行こうと言ったら大体は康生タウンが行き先になる。
平日の真っ昼間だというのにそこは老若男女問わず人で溢れていた。
「ヒナちゃん、何か食べたい物ある？」

「ゆっくりお話し出来るお店ならどこでもいいですよ」

「りょーかい」

レストラン街を適当にうろつき、時間帯の割に混雑していなかったカフェテリアに入った。

「席取ってくる」

「注文は？」

「きずきと一緒でいい」

「わかった、席頼んだぜ！」

豊田は席の確保に向かう。

カウンターで自分の分と豊田の分を注文し、豊田が見事に取ってくれていた席につき食事を始めた。

「この店あんま冷房効いてないな」

店内の温度に不満を持った豊田が言った。

「ちょっと暑いですね」

日名は着ていたベストをおもむろに脱ぐ。

「ちょっ、ヒナちゃん！？」

「はい？」

隣に座っていた築は慌てながらもしっかり日名の胸元をガン見していた。

「日名さん、下着してくるの忘れたんじゃ……。　きずきがめっちゃ見てるよ？」

「おい！　お前だって見てるじゃねえか！　人を利用して自分だけおいしい思いしようとすんな！」

そんな築と豊田の言い争いを見て暫しの間日名はキョトンと首をかしげ、そして2人が何を言っているのか察した日名は顔を徐々に赤らめた。

「そそそれはわ、わたしじゃないですっ！　梨華さんですよぉ！……そんなに見ないで下さい」

日名は脱いだベストで前を隠すが、築と豊田の態度は一変した。

「なんだ刈谷か」

「あぁ、梨華の方ね」

「あ、あの、どうしたんですか？」

不思議に思った日名は2人に聞いた。

「刈谷の奴はさ、結構日常的にポロってるから」

「逆にありがたみがないし見飽きた、みたいな？　でも俺は見るけ

ど」

「きずきくん……、エッチです」

「ちょっとヒナちゃん！　何で俺だけ！？」

そう言って対面に座る豊田を見ると、この話題は飽きたのかうつ向き気味で携帯をいじっていて、もう何も聞こえませんよと言いたげな態度であった。

無理矢理自分だけがエッチなわけではないと弁明したところで、豊田は何食わぬ顔で聞き流すだろうと予想できたので諦めた。

「くっ……」

「あ、あの、きずきくん」

「んあ？」

「少しお話したいことがあります」

日名は脱いだベストを膝にかけ、先ほどとはうって変わって神妙な面持ちで築に話しかけた。

「駅での事件なのですが……、犯人はどうやら『駒』だったようなのです」

「どういうこと？　捕まった奴は精神異常者ってことは知ってるけど……」

警察と話した時に犯人との関係などを聞かれたが、刈谷も築達も

犯人に見覚えはなかった。
警察が言うには犯人は、どこの言語でもない謎の言葉をただ繰り返している為に、精神鑑定に回したとのこと。
「犯人は、確かに自分は『駒』だと叫んでいました。　どうやら異世界関連の単語は、この世界の一般の方々には齟齬が発生するみたいなのです」
「なるほど」
築は険しい表情を浮かべながら豊田の方を見た。
「なぁ、豊田」
「あ？」
「俺とヒナちゃんは、異世界人と関係を持ち『駒』となった者だ」
「ちょ、ちょっときずきくんっ！？」
驚く日名に対して冷静な築。豊田の反応に予想はついた。
「きずき、狂ったのか？　それ何語だ？」
やはりといった所だ。
「悪い、何でもない。　邪魔したな」
「？？」

豊田は眉を潜めながらイヤホンを耳に突っ込むと音楽を聞き始める。

「ヒナちゃん、何でその犯人は梨華を狙ったんだ？」

「それはわたしにもわかりません……、梨華さんに異世界との繋がりはないかと。　わたしやきずきくんを狙うなら……」

「それだ！」

「はい？」

「犯人は俺かヒナちゃんと間違えて梨華を殺そうと、いや、殺す対象を俺と関わっている者・名前・性別で認識してたとするとヒナちゃんを狙ってたんだ」

犯人が異世界関連の事を漏らしていたということは、ただの無差別殺人や梨華への怨恨に対する犯行とは考え難い。

「そんな……、それじゃあ梨華さんは……」

「そうだよ、勘違いで殺されかけたんだ！」

築は拳を握りテーブルをガンッと叩いた。プレートに乗ったカップや皿がふわりと浮きガシャンと音を立てた。

賑やかだったカフェテリアが一瞬静まりかえり、飲食客の視線が集まる。

「ヒナちゃん……、どうしよう……。　俺のせいでヒナちゃんや梨華に危険が及ぶなんて……」

「きずきくん……」

築は表情を曇らせ、揺れるカップの中の飲み物を伏し目がちに眺めた。

カフェテリアは何事も無かったかのように喧騒を取り戻した。

第１８話　仲間とともに

アイスカフェオレの水面は、テーブルに振動を与えた為に小刻みな波紋が広がっている。
波紋が薄れて平穏な水面に戻っていくのを築は放心気味に眺めていた。
先ほどの事件は、ただの『駒』による争いなんかではない、紛れもない殺人事件だ。しかも異世界人や『駒』と繋がりを持たない一般人であり女子高生であり親友を、訳の分からない存在達の勝手な都合で失いかけた。
だが自分も『駒』であり、『駒』の中心的存在である『王』なのだ。
溢れる感情を自己処理できない。築は怒りを通り越して悲しくなり、顔を伏せた。
泣いているわけではないが、なんとなくそうした。

「きずきくん……」

日名は築にかけるべき適当な言葉が見つからず、口をつぐむ。

「ヒナちゃん」

「はい」

「俺を『駒』にした異世界人が言ってた。　俺は『駒』の『王』なんだって」

「っっ！！」

築はカフェオレのカップに書かれたロゴを穴が開くほど凝視しながら言った。
日名は吃驚仰天という言葉がぴったりな表情を浮かべている。
呼吸を整えた日名が口を開く。

「きずきくんが『王』だったなんて……。　きずきくん、『王』についてどこまで知ってるの？」

「とりあえず迷惑な連中ってことはわかる」

吐き出すように築は言った。

「『王』というのは、この世界に幾人と存在する『駒』の頂点。いわばそれぞれの『駒』が所属する異世界の勢力の王将。　最後まで生き残っていた『王』を従えている異世界勢力が、この世界の統治権を獲得すると言われているの」

「……」

築は心此処に在らずといった感じで日名の話をただ聞いていた。
昨日同じような話を黎から聞いていたが、口を挟んだってどうにもならないことは築も知っていたからだ。
日名は築を気にかけながらも説明を続ける。

「そして『王』は、異世界人・『駒』を含む敵勢力から狙われないように存在を隠したり自分の周りを『駒』で固めたりしています。
当然敵勢力の者は『王』を引きずり出す為に『駒』に攻撃を仕掛けます。　わたしがきずきくんを狙ったのもその為……」

「『駒』は『駒』を殺す。　それが『駒』でなくても『駒』だと思

っただけで殺す……」

「はい……。　『駒』は『駒』を殺すことを本能に位置付けています。　一種の呪いのようなそんな感じで……」

それならばなぜ日名は本能に忠実に築を狙うのではなく、全く逆の行為である築を守ることにしたのか。そんな簡単な疑問すらも今の築には思いつかない。

「てことはヒナちゃんも狙われるよね、刈谷も豊田も俺の家族とかも……」

「無いとは言い切れません……」

「だったら俺が死ねばいいのかな？　そうすればヒナちゃん達が狙われることもないし……。『駒』とかの抗争とかどうでもいい、俺が生きてるせいで周りの人間が死ぬなんて耐えられない」

己の死の恐怖より、周囲の人間が傷つけられることのが築にとっては恐ろしかった。

築はそんな極論を目を潤ませて言った。そうするのがベストだと思った。

「……」

日名は、そんなのダメ、と声を大にして言いたかったが、言った後に傷心極まる築を立ち直らせる言葉が見つからなかった。

「きずき？　どうした？」

さっきまで蚊帳の外にいた豊田が不穏な空気を察知して不意に口を開いた。

「いやさ……、俺の存在がみんなをね、危険にさらしてるからさ、そんなの嫌だし耐えられないからさ……、俺死んだ方がいいかなーって……」

「お前バカじゃねえの？　いきなり何言ってんだ？」

「あ？」

「どうしてそんなこと言い出してるのかは知らんが、自分だけ楽しようとするな。　もっとも、死ぬことが楽への最短経路だと思ってる奴なんてクズだがな」

先ほどまでは築と日名を気遣って音楽を爆音で聞いていたり狸寝入りをしていた豊田であったが、まるで全ての状況を把握しているかのようだ。

「……」

「おい、なんとか言えよきずき！」

豊田は築の胸ぐらをおもいっきり引っ張り自分の方へ寄せた。シャツのボタンが弾け飛ぶ。

再び3人が座るスペースに奇異な物を見る視線が集まる。

カフェテリアの従業員も怪訝な表情を浮かべこちらの様子を窺っている。

追い出されるのも時間の問題だろうが、そんなことに対する危機感など頭の一片でも覚えずに築と豊田はヒートアップする。

「俺のせいでお前が死ぬかもしれないんだよ！　そんなの嫌だ……、だったら俺が死んだ方がマシだろうが！」

「俺だって嫌だ、きずきが死ぬとか耐えられない。　残される方のが辛いことだってあんだよ！」

「わかった。　それなら俺と絶交してくれ。　俺と関わらない方が身の為だ。　ヒナちゃんもだ、俺なんかと仲良くしない方がいい、確実に不幸になる」

　掴まれた手を払い除けると築は声を低くしてそう言った。

「ほんっとにバカだなお前。　なんでそう極論に持っていくんだよ。　死ぬことが恐くてお前と友達なんかやってられるかっての。　一緒にそういうのを乗り越えてこその友情だろうが」

「バカはお前だ豊田。　そんな口先だけで簡単に言えることじゃないんだよ現実は。　冗談なんかじゃないんだよ」

「お前の言ってることが冗談に聞こえたら俺は普通に死ねよって答えてる。　なんでこんな話に発展したかよくわからんが、お前が自ら命を絶ったならば漏れなく俺も死んでやるよ。　本末転倒ざまあみろってな」

「こいつダメだ……。　ヒナちゃんからも言ってやってよ」

「きずきくんがわたしを突き放すなら、漏れなくわたしも寂しくて死んじゃいますよ？」

「もう知らね、豊田もバカ、ヒナちゃんもバカだっ、ついでに俺もバカだよ！　お前ら死んだら絶対許さないからな。　周りの人間が死ぬことも許さんからな。　冗談とか冗談じゃないとか関係ない、とりあえず傷つくな、死ぬな、以上」

「安心しろ。　俺は年金の元を取れるまでは死なないって決めてるんだ。　お前も俺より先に死ぬなよ？」

「わたしも運は良いんだよっ！　だから大丈夫な気がする！」

状況を把握していないくせにノリだけでこの場を丸く収めた豊田。どっちかというと楕円だったが、空気を読んで気配を消したり、急に話しに入ってきてノリだけで対処してしまう豊田がモテる理由がわかる気がする。

「ありがとう、豊田、ヒナちゃん」

「わたしこそ頼りにならないけど……」

「気にするな、きずき。　メシおごってもらったしな！」

「……誰がおごるって言ったよ？　しばくぞ」

「上等だ」

「ちょ、ちょっと！！」

漏れなく3人は、カフェテリアの従業員と警備員の手によって屋外に叩き出されたのだった。

第19話　幸せの

カフェテリアを叩き出されてしまった3人は行くあてもなく康生モール内をうろついた。
ウィンドウショッピングをしたり、ウィンドウショッピングと言うと聞こえはいいが所詮はひやかしだ。
その後は買う目的もないが本屋に入店した。
そして築は本屋でビニールで包装されていない漫画を見つけて立ち読みをする。
日名はお菓子の作り方の本を手にとっていた。
築は可愛らしいエプロンをした可愛らしい姿で可愛らしいお菓子を作る日名を想像してみる。なんか萌えてきた。
豊田は、よくわかるし儲けられるＦＸ、という本に興味を持ったのかそれを眺めている。
ＦＸなんて最近はやたら耳にするが、想像以上にハイリスクハイリターンなので興味本意で手なんか出さない方がいい、デイトレードくらいにしておくのが無難だろう。
それよりもよくわかる本がよくわかった試しが築には無かったので、よくわかる本がよくわかる本、というのを出版して欲しいと思った。
古本屋だったならば朝から晩までずっと立ち読みで過ごせるのだが、如何せん新書メインの本屋さんでは読める漫画に限りがあるし、雑誌コーナーは無駄に人が多いので敬遠する。
店の入口に存在感たっぷりに平積みされた書店員のオススメの一冊に僅かな興味を湧かせていると携帯が鳴った。
ディスプレイには刈谷梨華と表示されていた。
本屋を出て近くの休憩エリアのベンチに腰掛けると電話に出る。
「梨華？　もう大丈夫なの？」

「大丈夫大丈夫！　おでこの近くを3針縫われたけどねー」

あの高さから突き飛ばされて3針の縫合だけで済んだのは不幸中の幸いといったところか。

しかしその不幸が人為的に引き起こされた物だと思うと虫酸が走った。

「それならよかった、でいいのかな？　重傷なのか軽傷なのかとか俺わかんないからさ」

「ちょっと痛いけど重傷ではないんじゃないかな？」

「よくはないけど、よかったな。　もう家？」

「そうだよー。　ていうかちょっと聞いてよちっくん！」

周りに音が漏れてるのではないかと心配になるような大声で刈谷は言った。

「どうした！？」

「縫う時にさー、頭剃られちゃった」

「丸坊主っすか！？　ぷっ」

不謹慎ながら刈谷が丸刈谷になった姿をイメージした築は少し笑ってしまった。

「そんなわけないっしょ！　一部分だけだよ。　もうっ、マジで最

悪なんですけど」

「みんなにお前どんなイメチェンだよってツッコミ入れられるな」

「このまま登校するわけないじゃん！　エクとかウィッグで誤魔化すから」

刈谷のことだから傷跡を隠すというのを理由に必要以上に髪を盛ってくるに違いない。

風紀指導の先生も事情が事情だけに注意しづらい、弱みで弱味を握るなんて刈谷はなかなかの知謀家だ。

「ま、先生に目を付けられない程度にしとけよ」

「ちっくんはあんまり盛ってるのは好きじゃない？　ヒナちゃんみたいな黒髪ロングが好み？」

「盛るっていう表現があんまり好きじゃない。　髪型なんかその人に似合ってればいいんだよ」

中には全く似合っていない髪型をひけらかしている人もいるが、自分で似合ってると思っているのだから問題はない。そんな物は個人の主観に基づく。

「ですよねー。　それよりもさ、今日はありがとね」

術後の話などは余談に過ぎない。刈谷は築に感謝を伝える為に電話したのだ。

「俺の責任だしさ、当然だ」

カフェテリアで発覚したように、刈谷は『駒』の争いに巻き込まれたのだ。恨まれるのではなく感謝されるのはおかしいと思った。

「え？」

「最近俺運が無いから。　それも周りの人が事故とかに巻き込まれたり怪我したりするレベル。　だからさ……、あんまり俺に近付かない方がいい」

実際に事故に遭った刈谷だ。列車が迫るホームに突き落とされ、列車にひかれ死ぬ思いをしたなんていうＰＴＳＤを発症してもおかしくない体験をしたのだ。

築は刈谷が快く受け入れてくれると思った。

「嫌だよそんなの。　……大丈夫、あたし運いいから！　商店街の福引きでなんか当たるとか毎年切手シートが何枚も当たるとかそんなレベルよ？　ちっくんの不運も幸運に換えてあげるから」

あまり運が良くない築にとって、商店街の福引きに参加できることすら幸運に思えたし、欲しくは無いが切手シートがたくさん当たるなんて羨ましい。

しかしそのように思えたとしても関係ない。刈谷の答えは築の希望的予測の真逆だったからだ。

「ふざけんなよ？　お前は実際に怪我しただろ、今度は死ぬかも、殺されることだってあるかもしれないんだぞ」

異世界人の云々というのを説明して納得させたかったが、叶わない。その辺の単語は謎の言葉に変換されてしまうので伝えることは

不可能だ。

「ちっくんや光ちゃんが守ってくれんでしょ？　それがあたしの幸運、頼りになる友達がいること」

「……」

築は刈谷という人間も豊田や日名と同じくバカだと思った。それと同時に自分は不運だと言ったが、バカな友達に囲まれているのは幸運なのだとも思った。

「だから今まで通り仲良くしてよ？」

「……バカ。　わかったよ、ありがとな」

「あっはっはー。　それじゃあまた学校でね」

「ちょっと待って、これだけ言わせてくれ！」

「何よ？」

「ちゃんとブラしてこいよ。　胸ばっか意識させられるとエロい奴だと思われるから」

「自覚なかったんだ？　じゃあね、ばいばーい」

「え？　ちょっと！　梨華？　……切れとるやんけ」

刈谷の築に対するイメージを全否定したかったが、受話器の向こう側に刈谷はもういなかった。

携帯をポケットにしまうとベンチの真横に設置されていた当たり付きの自販機で飲み物を買う。ルーレットの数字がぐるぐると回転を始めた。

「お」

ルーレットの数字が珍しく揃ったのを、築は感慨深めに眺めたのだった。

第２０話　どうすればいいか

当たり付き自販機で奇跡的に大当たりを引いたわけだが、既に喉を潤す目的で購入した濃いことがウリの緑茶を持っている。
このての自販機は、大当たり後に長らく迷っていると大当たりを取り消されるか、自販機が適当に選択したジュースが勝手に出てくるかのどっちかだ。
時間に逼迫されながらなかなか決められずに悩んでいると、書店から日名が出てくるのが見えた。

「ヒナちゃーーん！」

手招きしながら日名を呼んだ。
日名は声の主を発見すると書店名がプリントされた袋を胸に抱えながらぱたぱたと走って来た。

「どうしたの？」

ほんの少しだけ首を傾け日名は尋ねた。

「ジュース、好きなの押していいよ」

「わぁ、ありがとう！」

日名はニコニコしながらボタンを押すと、ガシャンと音を立てて缶ジュースが吐き出される。
宝物を扱うかのようにジュースを取り出した日名は缶のプルタブに指をかけた。

「ふた開けてあげようか？」

「ううん、大丈夫だよ」

「あ、そう」

非力そうな日名のことだ、プルタブに悪戦苦闘すると思いしゃしゃり出たのだが、この差し出した手はどうすればいい。

行く宛を失った手を、いかにもストレッチですよとでも言うようにぶんぶんと大袈裟に回す。

「あー、ほぐれたー」

そう言い放ってそしてベンチに座った。

日名も築の横に近くとも遠からずな微妙な距離を空けて座る。

「なんの本を買ったの？」

築は適当に話を振った。

「お菓子作りの本だよ」

「ヒナちゃんお菓子好きなんだ？」

「うんっ、マフィンとかフィナンシェとか甘すぎないお菓子が好きっ」

日名はお菓子の絵面でも想像したのか、とろけそうな笑顔を浮かべると缶に口をつけた。

「おいしいよね、マフィン」
築は答え緑茶をグビグビ飲んでいると自販機からガシャンと音がした。
「お前らカップルみたいだな」
日名との甘いトークに夢中になっていたのか豊田が忍の末裔なのかはわからないが、いつの間にかそこにいた豊田が飲み物を取り出し言った。
「羨ましいか？」
「ほどほどにな。　そろそろ帰ろうぜ、疲れた」
豊田はスポーツドリンクを一気に吸収すると歩き出す。
築と日名も空き缶をゴミ箱に投げ入れると豊田の後を追った。
雨が降りそうで降らない優柔不断な空模様だったのでダッシュまではいかないが早歩き程度で家に帰った。
「またな」
「また明日ねっ！」
築の家の前で解散した。
夜の帳が下りてきたのか、積乱雲が分厚くて日光が届いていないのか辺りは薄暗く、明日も嫌な天気なのかと築は嘆息を漏らす。
雪が降れば庭を駆け回る我が家の犬も、雨で濡れるのは嫌いらしく小屋に避難していた。
家に入ると築は真っ先に黎の部屋へとカチコミに行く。

黎は細かい字の羅列であるハードカバーを読んでいた。深い皺をさらに深くし本にのめり込んでいて、非常に話しかけにくい。話しかけたら殺されるのではないかと思ってしまうような不可侵領域を形成している。

築は勇気を振り絞って黎に話しかけた。

「ばあちゃん、ちょっといいかな？」

「……」

「ばあちゃん！　聞こえてる？」

「……」

「クソババア……」

「死にたいのか？」

「生きたいです。　……そんなことはどうでもいいんだよ！」

「何の用じゃ？」

黎は本に栞を挟む。本を閉じた時のパタンという音は、場面転換に相応しい音だった。

「今日友達が『駒』に襲われた」

「なんと……、襲撃者はきずきが『王』だと知りその友を襲ったのか？」

「わからないけど多分知らなかったと思う。　襲われたのは『駒』じゃない普通の友達だ」

「『駒』じゃないとはきずきの周りに誰ぞ『駒』がおるのか？」

「うん、昨日電話してた日名桜子って名前の娘」

「日名か……」

黎の態度が少し変化した。日名という名前に心当たりがあるようだ。

「知ってるの、ヒナちゃん」

「『駒』の方は知らぬが、そやつと関係のある者は知っておる」

「……」

「儂が矢作橋と名乗っているように、そやつも日名と名乗っておる異世界人じゃ。　日名は元々我が国とは敵対関係にあった国の者なのだが……」

「だって日名桜子は俺を守るって言ってくれたんだよ？　おかしくね？」

「うむ……、それが不思議だ」

なんでもかんでも聞けば答えが出てくるというわけではないようで、異世界人であっても知らない事はあるようだ。

「襲撃者はどうなった？」

「駅での事件だったから明日の地方欄でも見れば載ってると思う」

「そうか。　きずきが『王』であることが漏れたのではなければひとまず安心じゃ」

「安心じゃねえんだよ。　友達が殺されかけた、俺はどうすればいい、そんなの耐えられない」

「本題はそこじゃな？　簡単なことじゃ。　きずきが『王』であると知られないこと、味方の『駒』を探すこと、そしてやられる前にやること、以上」

黎は言い終えると再び本を開き読みふける。完全に自分の世界に入ってしまっていた。

「どこが簡単だよ……」

築はつぶやくと部屋に戻り、自分も自分だけの世界に逃避する為に埃を被った小説を真剣に読むのであった。

第21話　初対面

久しぶりに本を読むと疲れる。だけどその分だけ満足感を得られた。
築は本を読むのは嫌いではないのだが、本を読むより優先したい事柄が多いせいで無意識に読書は後回しになってしまうのだ。
モテようと本を知的アピールに利用する輩も多々存在するが、築はそれが無駄な装いだと知っていたのでやらない。
知的ではない者が偽の知的さなど醸し出してもすぐにバレてしまう。そもそもそんな薄っぺらい偽装を考えつく時点で知的には程遠い。

「あぁー、疲れた……」

全身の骨をポキポキ鳴らし大きく息を吐いた。

「『王』ってバレないようにしろ、『駒』を集めろ、殺られる前に殺れ、か……」

家訓や格言のように、半紙に墨で書いて額縁に入れて壁にでも飾っておいたほうがいいか。そうしろと言われても全力で拒否するが。

「……」

部屋を見渡す。家具の位置も照明の明るさもいつもと何も変わらない。
そんなどうでもいいことに安堵した。
次の日、『駒』の『王』になって、承諾してないが勝手に祭り上げられてしまってから3日目の朝だ。

「おはようございます！」

今朝も元気に玄関先で待っていた日名が言った。

「おはよう、ヒナちゃん。　今日も暑いね」

ボタンを失っただらしのないワイシャツをふぁさふぁさしながら言った。

シャツを買わないといけないのを忘れていた。シャツってこんな激しく消耗する物なのだろうか。

豊田みたいに意図的に胸元を解放しているのなら格好いいかもしれないがそれとは違う。

「きずき、これを持っていけ」

庭に立っていた黎が築に向かって何かを投げた。

「うわっと！」

築は手をかざしてそれをキャッチした。ずっしりとした重量感、それは黒塗り聖柄の日本刀だった。

築は恐る恐る刀を抜いてみた。

曇天に似た色の刀身が姿を見せた。

「ばあちゃん！　何だよこれ！」

「日本刀じゃ。　といっても、切れ味など殆ど無い模造刀のような物。　こんなんでも無いよりマシじゃろて」

「そんなの見ればわかるわっ！　捕まる、絶対捕まるよ！」

「その刀は異世界で製造された物。　普通の人間には何の違和感も覚えさせないから安心しろ」

異世界人が突如家族になっても気付かないように、異世界関連の言葉に靄がかかるように、異世界の産物も正しくは認識されない、そういう理屈だ。

「ではな」

黎は家に入った。

「きずきくん、あの方が」

「俺のばあちゃんだ、異世界出身のな」

そして2人は学校に向かった。

教室では頭に包帯を巻いた刈谷がクラスメイトに囲まれていた。

ちらほら聞こえるのは昨日の事件の話だ。

そりゃあいきなりクラスメイトが頭に包帯を巻きつけて登校していたら興味も湧く。

「大人気だな、梨華」

築は机に鞄と刀を置いて刈谷に言った。

「あ、ちっくん！　それでねみんなー、ちっくんと光ちゃんが助けてくれたんだよね。　死ぬかと思ったよ、あっはっはー」

「無事で良かったよ。　てかお前は頭を強打して気絶してたろ」

刈谷は笑いながら頭を掻いた。

「そうなんだよね、ちょっと記憶がおかしくなったのかわかんないんだけどさー、朝起きたらね、家族が増えてたんだよね」

「あ？　何言ってんだ梨華？」

「あたしってさ、お父さん死んじゃってるじゃん？　だけどさ、普通に朝お父さんが居たんだよね」

刈谷の父は刈谷が幼い頃に他界していた。そんな話を築も聞かされた記憶があったのだが。

築は今の刈谷と同じ体験を数日前にしていた、まさかと思った。

日名も目を丸くしている。

「ヒナちゃん……、刈谷は、まさか……」

「……はい」

築と日名はお互いの丸くなった目を見合わせる。

「なんだ、刈谷もか？　俺もさ、今朝死んだじいちゃんにいってらっしゃって言われた。　……何言ってんだ俺」

自分の席で優雅に読書していた豊田が、視線は文字の羅列から離すことなく言った。

築と日名はますます驚く。驚きのあまりに眼球がぽろっと落ちてしまうのではと思うくらいに築は目を見開いた。

「きずき、お前なんちゅう顔してんだ。　玉（ギョク）……、ちゃんとしまえよ」

「お、おう悪い。　……人の目玉を卵扱いすんなよ」

築はギュッと目を瞑る。

「意味不明な話をしたけどな、そこまで驚くことか？」

「いや、そうじゃないんだ……、そうじゃないんだがちょっとな」

これは2人のところにも異世界人が現れたということなのか。
しかし早合点するには情報が少ない。変に鎌をかけてもややこしくなりそうだし、ここは聞き流しておいた方のがよいのだろうか。

「おはよう」

そんなことを考えていると教室の扉が開き1人の女の子が入ってきた。
背丈は刈谷より少し低くて短めの髪をツインテールにしている。顔立ちは少しつり目で少々キツさを感じさせる印象だがとても可愛らしい。剣道部にでも所属しているのだろうか手には竹刀ケースを持っていた。
しかしそんな彼女の名前を築は知らなかった。

「おはよう、名古屋さん」

「おっはよう、瑞穂！」

「お嬢、おはー」

どうやら名前は名古屋（ナゴヤ）　瑞穂（ミズホ）でニックネームはお嬢らしい。
それでも築にはピンとこない。
クラスにこんな女子いなかったはずだ。
流石に全学年の女子を暗記しているわけでなくとも、クラスメイトの顔や名前くらい築でも覚えているはずだ。

「誰だろ、あの子」

「さあ？」

本を閉じた豊田も首をかしげていた。
築だけでなく豊田や刈谷、日名も名古屋という女の子が誰なのかわからないようだった。
とんでもなく嫌な予感がした築であった。

第２２話　乙女大乱

築は名古屋というクラスメイトが一体何者であるか考えていた。

「桜子さん！」

名古屋は日名を呼んだ。

名古屋は日名を普通のクラスメイトとして呼んだのだろうか、それとも別の思惑があって呼んだのかは判断が難しかった。

「な、なんですか？　み、瑞穂さん？」

日名は可能な限り平静を装って名古屋の方へと駆けて行った。

「ちょっとちょっと体育倉庫まで着いて来てくれない？　備品運ぶの頼まれちゃって」

「はい……、いいですよ」

日名と名古屋は教室を出て体育倉庫へと向かう。

体育倉庫はグラウンドの端の林の中に忘れられたかのように建っていて、一旦上履きを脱いで靴に履き替えなければならない。

もうすぐ朝のホームルームが始まる時間だったので人影は無かった。

名古屋は自分と初対面ではないのかもしれないが、自分は名古屋瑞穂という人物と初めて対面した。

人見知りでなくとも居心地が悪い状況なのに、人見知りの激しい日名にとっては生命の危機さえ感じる息苦しさだった。

会話という会話もされない気まずい空気のまま２人は人気の無い

体育倉庫までやって来た。
周りは虫の声で賑やかだったが、校舎からは距離があるので生徒達の喧騒は聞こえず、死角にもなっているので校舎内の生徒の姿も窺えず余計に心細く気まずい。
名古屋はポケットから体育倉庫の鍵を取ると南京錠を開錠した。

「っっ！」

「え？」

来た道を眺めていた日名が振り返った瞬間である。
日名の頬ぎりぎりの場所を固体が物凄い速さで通過した。
それは木に直撃し生々しい傷を刻むと地面にガシャンと落ちた。

「……」

真鍮製の南京錠だった。
名古屋はそれを日名に投げ付けたのだ。
あんな物が頭部にクリーンヒットしたら大怪我では済まされない。

「運がいいねいいね。　それとも瑞穂がノーコンだったかな？」

「……」

名古屋は無邪気な笑顔を浮かべているが眼光は鋭くとても冷たい。
日名はそんな名古屋の目の奥を見るように視線を合わせた。

「瑞穂さん、あなた『駒』ね？」

名古屋が『駒』であるのでは、と思える材料は概ね揃っていた。

「そうだよそうだよ、瑞穂は『駒』、だからだから敵対する『駒』の桜子さんを今から殺しまーす！」

名古屋はエナメル製竹刀ケースのファスナーを開け中身を取り出した。

現れたのは2振の短刀だった。軽量で女の子にも扱い易く殺傷能力も申し分ないだろう。

「……こんなところでわたしを殺して大丈夫なんですか？　騒ぎにもなりますし……」

「大丈夫大丈夫、ここ誰もいないし。　あと『駒』は死んだら消えちゃうの、人間界から。　はなっから存在しなかったことになるの。学校で堂々と人を殺しても安心ってわけ。　初めて初めてお話しするのにこんなことになっちゃうなんてね」

「わたしは……、殺したくないっ！！」

「桜子さんはいいんだよいいんだよ誰も殺さなくて。　ここで消えて無くなるんだから」

明らかに名古屋が有利な状況だが、日名もみすみす殺されるわけにはいかない。

短刀を構えてじりじりと距離を詰めてくる名古屋。

対峙した場合、凄まじい闘気を放つ相手の眼を見てしまうと意識しなくても勝手に身体が畏縮してしまう。

日名は冷静に名古屋の全身に視線を移す。普通の女の子の体躯だ、過剰に怯えることはない。そして観察しながら名古屋に歩調を合わせて後退する。

名古屋も丸腰の日名が相手なのになかなか攻めない。能天気に見えるわりによく考えて行動しているようで油断も隙も見せない。

「っっ！」

名古屋の肩がピクッと動いた瞬間、丸腰の日名から名古屋へと突進する。

「バカなのバカなの？」

名古屋は飛んで火に入る夏の虫を待ち構える。

日名はスピードを落とすことなく距離を縮め、名古屋の切っ先が届かないぎりぎりの位置で急ブレーキをかけると、ポケットに手を突っ込み携帯を掴むとダッシュの勢いに乗せて名古屋めがけて投げつけた。

「っっ！」

日名の携帯は名古屋の慎ましい胸にヒットしたが大したダメージにはならない。だが、名古屋は避けようとした反動とキャッチしようと手を素早く動かしたことによって左の短刀を手から滑り落とした。

「チっ！」

名古屋は落ちた短刀を拾う前に左から右へと横薙ぎの一閃を放つ。

「ふっ！」

その動きを読んでいた日名は後ろに飛び退けてかわし、名古屋の

後ろから回り込むように短刀を拾う。

「させるかさせるか！」

名古屋は左足で短刀を踏み奪われるのを阻止しようとした。

「ふぅ！」

日名は短刀を踏み不安定になった名古屋の両足首を掴み一気に引っ張った。

「きゃわぁ！？　はぐぅっ……」

バランスを崩した名古屋は前から倒れ、地面に叩き付けられ嗚咽を漏らす。

日名は素早く身体を起こすと短刀を持っている名古屋の右手をローファーの踵で踏みつけた。

「はぐぅぅ……！！」

ミシミシと骨が軋む感触が伝わってくる。

「今はわたしが優位に立っています。　どうしますか？」

日名は名古屋を見下ろしながら言った。

「くぅっ……、ぅふふ、わはははっ！　まだまだ……」

名古屋は爪を立て日名のニーソックスに包まれた太股を抉る。

「くっ、はぁ……」

白雪のような日名の肌に食紅を垂らしたかのような赤い傷が浮く。

「痛い痛いでしょ？　あなたは片足を失った、瑞穂は片手が使えない……、でもまだまだやれるやれる！」

名古屋をこれ程までに駆り立てるのはなんなのだ。

あまりの気迫に日名は脚を庇いながら少し後退り、その場所から訴えかけるように言った。

「わたしは殺り合いたくないっ！　いい加減にしてください！」

「あなたの近くに必ず必ず『王』がいるはず。　瑞穂が『王』を殺す」

「……」

「『王』は誰？　言いなさいよ、瑞穂が殺すの」

「黙って下さい」

「何々？　その変わり様。　特別な感情でも持ってる持ってるの？」

「黙って……ください……」

「『駒』が『王』にねぇ。　残念残念、それは叶わぬ……」

「黙れぇぇぇぇ！」

日名は激昂すると落ちていた短刀を拾い上げた。
自我を失った日名は名古屋を本気で殺そうと短刀を大きく振り被った。

第２３話　乱入

名古屋めがけて振り下ろした日名の一撃。
だが名古屋はそれを短刀で受け止め、日名を蹴り飛ばし起き上がる。
話術で日名の意識を自分に集中させ、その影で短刀を負傷していない方の左手に持ちかえていたのだ。

「くぅっ！」

「あなたが優勢？　それはそれは違う！」

名古屋は追い撃ちをかけ日名はそれを防ぐ。
鋼と鋼がぶつかり合う音が林に溶けていく。

「っ……」

思った以上に深く傷つけられた脚は動く度に力を込める度に激痛が走る。

「脚、痛いでしょ？　すぐにすぐに痛みも何も感じない身体にしてあげる」

一方名古屋は軽快なステップを踏んでいる。

「……」

「何を考えてるの？　助けなんかなんか来ないよ。『駒』同士の殺し合いなんて一般人にはごく普通の出来事のように見える」

「助けなんて……」

日名は短刀を下段で構える。その方が他の構えに比べ脚への負担が少ないと思った。

名古屋は斬りかかっては下がり斬りかかっては下がるヒットアンドアウェイを繰り返す。

日名は自ら深く攻め込めない上にカウンターをするにも名古屋が素早く後退してしまうので撃てない。

戦況は両者手負いながらも一方的に攻める名古屋の優勢だ。

「守ってるだけじゃ勝てないよ！　でもでも関係ないけどね。　あなたは誰の記憶にも残らずひっそりここで死ぬんだよ？」

「……！」

再び日名に斬りかかろうと名古屋が動き出したその時だった。

もう授業が始まっている時間にも関わらず林に人の気配がした。

「誰かな？　体育の授業をしてる人かな？　用務員さんかな？　どっちでもどっちでもいいけど。　絶対に首なんか突っ込んでこないんだから。　ゲームと似てるね、街中でいくら戦闘してもＮＰＣは止めもしない」

名古屋はその場で屈伸運動や伸脚運動をしている。

「お前ら何してんの？　授業始まってるよ」

木の影から男の声がした。

「珍しい珍しい。　『駒』の殺し合いに干渉してくる一般人も稀にいるらしいからね。　それでもそんな光景に疑問すら浮かべないけど」

その声の主が徐々に近づいてくるのを感じる。

「ヒナちゃん！？　どうしたの！？」

姿を現したのは築だった。

「きずきくん……」

「何者なの、あなた」

「あ？　矢作橋築だよ、お前こそ誰だよ？」

「あなたの名前なんてどうでもどうでもいいの、知ってるし。　あ、瑞穂は名古屋瑞穂」

「ヒナちゃんに怪我させたのお前だな。　どうして喧嘩なんか……、……、喧嘩なんかじゃねえな……」

「あなたも『駒』ね」

「もってことはあんたも『駒』か」

「そうだよそうだよ」

教室で感じた名古屋に対する違和感。それは名古屋瑞穂が『駒』であったから感じた物なのか。　早朝テストの日に『駒』である日

名と出会った時には何も感じなかったのに、何故そんな物を名古屋に対しては感じたのであろうか。あの時は勝手に『駒』にされてそれに合意してなかったが、日名桜子の存在は以前から認識していた。
名古屋瑞穂は日名のケースとは全く違う。

「てかお前のこと初めて見る。　クラスメイトなのに何でだ？」

築は名古屋に聞く。

「瑞穂はあんたのこと知ってたよ。　普通にお話しとかもしてたし」

「おかしいだろ。　俺は今までクラスメイトであるお前の存在を知らなかったんだぞ？」

「そんなことそんなこと瑞穂に聞かれても困るよ」

名古屋なら知っていると思ったが見当違いだったようだ。
日名に聞いてみようと思ったが、例え空気を読めない人でも流石に今聞く状況ではないことくらい分かる。

「きずきくん、離れてて。　彼女は敵だよ」

「離れててって……、ヒナちゃんが離れてて」

「だって彼女はっ。　わたしが消さないときずきくんを」

「そんなのいいから」

築は日名の前に立ち名古屋と対峙した。

「お話しは終わった？　あなたが先に死んでくれるんだね」
「まだ終わってない。　だから後で話す」
築は武器も策も持たなかったが名古屋に向かって全速力で走った。
「バカなのバカなの？」
名古屋は短刀でヒュッと空を斬ると切っ先を築に向けて構えた。
「うおぉぉぉ！」
それでも築は速度を緩めない。
築は一気に距離を詰め素手で短刀の刃を掴むとそのまま名古屋を押し倒す。
「なん……なの……」
築は名古屋の短刀を奪い林の中に放り投げた。
生命線が前より深くなった手を築はまじまじと見つめる。
血が泉のようにこんこんと湧き出ていた。尋常じゃないくらい痛い。
「あーあ。　……早く早く殺しなさいよ」
名古屋は涙を浮かべている。
「断る。　クラスメイトを殺すとか嫌だよ」
「はは、殺しておいた方がいいよ？　でなきゃでなきゃまた日名桜

子を襲う」

「俺が『王』だ」

「っ！」

名古屋は涙が浮かんだ眼を見開き驚いた。

「ヒナちゃんじゃなくて俺を狙えばいいさ。　でも今日は勘弁な、手痛いし」

「ダメだよ……」

築の背後によろよろと近づきながら日名が言った。

「え？」

「ここで殺しておかないと……」

日名は短刀を振り上げた。

第２４話　大人のお姉さん

殺気、というよりは深い悲しみが漂っている日名。
日名の目に築の姿は映っていない。

「日名ちゃん、その刀どうするの」

「どうするって……、決まってます」

日名は築の下敷きになっている名古屋を見てから言った。

「決まってない。　刀を納めて、日名ちゃん」

「お断りします。　やることをやったら納めますので」

日名はもう名古屋を殺すことしか念頭に置いてない。

「わかった……」

築は傷１つない左手で日名の短刀の刃を握った。
これで両手の生命線が延長されたわけだが、寿命は果てしなく縮まっている気がしてならないのだが。

「きずきくん！？　やめてください！」

「断る。　ヒナちゃんは俺のお願い聞いてくれなかったよね？　くっ……、だから俺も聞かない」

力を緩めることなく築は短刀を更に強く握り締める。

刃がちりちりと肉に食い込んでいくのが伝わる。
両手を真っ赤な血で染めている築、手を筆代わりにしてダイナミックなアートに勤しんでいる芸術家のような風貌だ。

「きずきくん……」

短刀を持つ日名の手から力が抜けていくのがわかる。
完全に脱力した日名を見ると泣いていた。
右を見れば涙を流しながら空を仰いでいる名古屋。左を見れば涙を浮かべうつ向いている日名。
その2人の中心には両手から血を垂らしている築。
偶然通りかかった人が見れば一体どんなことを思うだろう、愛憎が生みだした修羅場といったところだろうか。
もっとも、一般人がこんな無茶苦茶な光景を見ても何も思わない。これは普通の光景なのだ。

「矢作橋築。　瑞穂は瑞穂はあなたを狙い続ける。　そして必ず仕留める。　瑞穂を殺すなら今が最後のチャンスよ」

「勘弁してくれよ……」

築はそう言うと名古屋から離れこの場を後にした。

「何なの何なのあいつ。　自分から『王』ってばらしちゃった……」

築の背中を見つめる名古屋。
今すぐに起き上がって襲いかかれば簡単に仕留めることができるのに名古屋はそうしなかった。

「日名桜子、瑞穂は瑞穂は矢作橋築を諦めない。　殺されたくなか

ったらしっかり守りなさいよね」

「……はい」

名古屋は服に付着した砂や埃を払い除けると森の奥へと消えて行った。

日名は脚の傷の痛みに耐えながらも築を追おうと校舎へと向かう。

「日名ちゃん」

「きずきくん……」

引き返して来た築と森の入口で遭遇する。

「背中、貸すよ」

「え？」

築は腰を落として日名を背中に乗るよう促した。

「でも……」

「歩けないくらい痛いんでしょ、その傷」

「血が……」

「あ……」

築は自分の掌を眺める。

滴る鮮血、走る痛み、当然日名をおぶれば日名の制服に血糊がべ

ッタリと染み込むだろう。

「恥ずかし過ぎるだろ俺！　くっ……」

考えもせずに突発的な行動に移るのは悪い癖だ。

この体勢をどう誤魔化そう、屈伸運動ですけどと言い張るには苦しい。

「高校生1人、保健室までお願いします」

日名は築の背中に自分の身体を預けた。

「初乗りは無料だよ、お嬢ちゃん！」

築は日名を背負うと戦場から脱出した。

歩く度に日名の感触がダイレクトに伝わってくる、柔らか過ぎるだろ女子という生き物。

日名のお尻を役得として触ることも可能だったが、理性をしっかりと維持していた築は普通に後ろで指と指を絡めて日名を支える。

「重くないかな？」

「うーん、あんまり女の子をおんぶしたことないからなあ……、適度な重さ、かな？」

「ふふっ、ありがとね、きずきくん」

「はいはい、どういたしまして」

背中に当たる日名の胸を一人楽しんでいた築は、自分も重傷を追

っているとは思えない働きぶりだった。
時間はもう1限目の授業が終わる頃だ。
こんな姿を他の生徒に見られたら厄介だったので急いで保健室へと向かう。
養護教諭に事情を説明するのはかなり困難だ、当たり障りないベストな説明をしなければと築は扉を開く前に考える。

「あら、どうしたの？」

保健室から出てきた養護教諭に見つかってしまった。

「え、いや、そのー、異世界人に襲われました！」

「……」

養護教諭は無言で回れ右をすると保健室の隅にある椅子へと腰を下ろし、人差し指をクイクイと曲げ中へ入るように指示を出した。
築は日名を背負いながら大人しく従った。

「それで？　貴方と貴女はどの勢力に属しているの？」

改めて養護教諭を見るととてつもなく美人でしかもなまめかしい、大人の色気で目眩がしてしまいそうな程だ。
築の知っていた養護教諭はどぎついババアだったので、多少の怪我を負っても保健室に行くのは極力避けていたのだが、いつの間にか変わっていたので驚きだ。

「えと、2年生に属してますけど」

「……」

養護教諭は築を睨みつける。築がそういう性癖の持ち主なら興奮してしまったかもしれない。

「わたしときずきくんはそれぞれ別々の勢力に属しています」

「あら、別勢力の『駒』と『駒』がラブラブなんて珍しいわね」

「！」

この養護教諭も異世界人だった。

冷静な日名に対して築はひどく混乱したのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7548s/

１等・前後賞合わせて漏れなく災難！？

2011年5月23日08時53分発行